酉松会新聞 The Yushokai Shimbun

第 17 号

令和 6 年（2024）
3 月 18 日 発行

巻頭挨拶　P3

- 緒方　徹　（昭 49 卒 会長）：2024 甲辰・始めの年に
- 木村 義幸（平 6 卒）：酉松会総会及び祝勝会のご報告
- 戦 記：令和 5 年度（2023）シーズン

リーグ戦を観戦して　P9

- 石井　徹　（昭 30 卒）：小平随想
- 橋詰 邦弘（昭 56 卒）：四つのしんぼう

戦いを終えて　P14

- 近岡　頌　（4 年 学生監督）：シーズン総括・今後の展望
- 渡邉 直樹（4 年 主将）：目に見える結果が全てではない
- 大石 光誠（4 年）：ア式の 4 年間を振り返って
- 狩野 琳太朗（4 年）：頭蓋骨骨折
- 工藤 綾也（4 年）：ア式という組織の大きさ
- 清水 一貴（4 年）：食事 LINE について
- 杉田　周　（4 年）：4 時間の座学
- 野口 泰人（4 年）：最高のア式生活を振り返って
- 藤村 俊輔（4 年）：B チームコーチとして
- 向井 友紀（4 年）：リーグ戦初出場
- 六角 勇人（4 年）：2023 年度のリーグ戦

事業活動から　P32

- 長島 直紀（4年 事業部長）：感謝と決意
- 小林 尚史（4年）：IKKYO FOOTBALL ACADEMY の軌跡
- 溝口 幸太郎（4年）：動画に残す一橋の魅力
- 清水 真衣（4年 MGR）：ア式での経験
- 鈴木 元貴（4年）：加藤さんの先輩風

令和 6 年度シーズンに向けて　P45

- 山﨑 惇樹（新4年 主将）：チャレンジャーとして
- 木室 孝輔（ヘッドコーチ）：ドラマチックなフットボールについて
- 宇都宮 彩輝（新 3 年）：まちとともに強くなる
- 深田 勇輝（新 2 年）：ア式という場所

海外便り　P53

- 幸松 栄夫（昭 61 卒）：メキシコは寛容の国
- 佐々木 伸太郎（平 13 卒）：オランダ ロッテルダムでの生活
- 竹本 圭佑（平 28 卒）：日本から 30 時間の国 南米チリ
- 普勝 悠暉（平 29 卒）：中国 大連での駐在生活

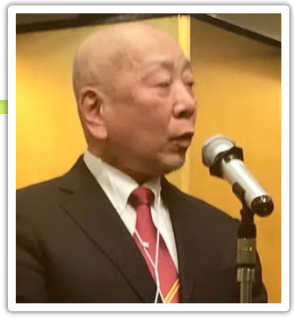
私の学生 LIFE　P73

- 相原 昌典（4年）：62 番と 63 番の絆 ～国を超えて～
- 米 凛太朗（4年）：終わりの始まり
- 駒形 拓海（4年）：FC サイクリング
- 北河 耕太（4年）：コロナ禍の「等々力」時代
- 木下 涼太（4年）：自分探し in ロンドン
- 山下　諒　（4年）：ア式に入部する前の生活
- 木村 航大（4年）：しんどかった瞬間 ～「武」と「フィレンツェ」
- 小松 怜平（4年）：若者の特権とは

編集後記　P88

- 福本　浩（昭 52 卒 編集長）：酉松会にヒエラルキーあり!?

巻頭挨拶



⚽ 2024 甲辰・始めの年に

緒方　徹　（昭 49 卒）　酉松会会長

今年の元日に発生した能登半島地震で亡くなられた方々には、
心から哀悼の意を表したい。また被災された方々にはお見舞いを申し上げたい。
私事だが実母も熊本地震で被災したので心からそう思う。

2024 年は干支で言うと、「甲辰（きのえ・たつ）」で 60 年ぶり。
「甲」は物事の始まりや成長という意味がある。
60 年前の「甲辰」の年は東京オリンピックや東海道新幹線開業など
経済発展の象徴的な出来事が相次いだ。

2 月 22 日、
株式市場で日経平均株価がバブル期の最高値を 34 年ぶりに上回った。
早速政財界からは歓迎する声が聴かれた一方で、
生活実感にはまるで結びついていないという街の声も多かった。
バブル期の有様を見聞きしている私は、株価の上昇だけで浮き浮きする気持ちにはなりにくい。

中国南宋時代の臨済宗高僧の語録「虚堂録」に
「雲は嶺頭に在って閑不徹」という語句がある。「閑不徹」とも言う。
雲は山の上に在ってどこまでも静かでのんびりとしているという有様を言う。
「閑」はすべての分別を払い尽くした自由な境地、「不徹」は徹せずではなく逆に徹すること。
あくせくせず、慌てたり，うろたえたりせず、自由で静かな姿に徹してゆくことだと諭している。
凡人にはなかなか難しい境地だが、騒がしい世相の中で少しでも近づくことが出来ないかと思う。

一橋大学ア式蹴球部は今年新しいリーグに昇格して戦いに臨む。
難しい戦いも多くなると思うが、現役の諸君は臆することなく
是非伸び伸びとサッカーをしてほしい。怪我が無いように願いつつ健闘を祈る。

また今年はオリンピック・パラリンピックもある。
「閑不徹」の心境を目指しながらも、
熱い心で声援を送ることを心掛けたい。

⚽ 酉松会総会及び祝勝会のご報告

木村 義幸　（平６卒）　代表幹事

コロナ禍で昨年まではオンライン開催が続いておりましたが、
4 年振りに対面での酉松会総会が 1 月 13 日に如水会館で開催されました。
今回は 2023 年度関東大学サッカーリーグ東京・神奈川 2 部での優勝祝勝会も同日に開催され、
OBOG 45 名、学生 85 名、そして祝勝会には 4 年生の父兄を中心に 18 名が出席し、
総勢 148 名の盛大な会となりました。午前中には小平グラウンドで OBOG による交流戦が行われ
30 名弱のメンバーが新春の人工芝の上で汗を流しました。

総会では緒方会長の挨拶、学生による「2023 年度活動報告」「中期経営ビジョン」
「2024 年度年間計画」の説明、木室ヘッドコーチの挨拶の後、付議事項として 2023 年度決算と
2024 年度予算案、新役員体制の説明があり、いずれも承認されました。
最後に日置副会長の挨拶で総会は終了となりました。

次に総会の議事の中で参加者の関心が高かった事業部の取り組みについて紹介したいと思います。
かつてア式蹴球部ではサッカーのプレーを純粋に楽しみ、所属リーグで優勝を目指すことを目的に
活動を行ってきましたが、2020 年度より以下の４つの事業部を立ち上げ、
集客と収益の両立を目指してア式蹴球部の価値創造に学生主体で取り組んでおります。

＊タウンコミュニケーション（地域密着活動・サッカースクール）
＊FRM（ファンクラブ運営・グッズ販売・高校生リクルート活動）
＊メディア・フットボール（ホームページ・SNS・You Tube 発信）
＊パートナーセールス（スポンサー）

活動運営費の大宗を依然として酉松会会員の寄付で賄っておりますが、
地域との共生を図りつつ各種事業を収益化し自主財源を増やしていくことを企図しております。
2020 年度から 22 年度が探索フェーズで、現在は成長フェーズの２年目となります。
2023 年度は地域の子供向けのスクール活動を IKKYO FOOTBALL ACADEMY と命名し、
サッカースクールと勉強を教える活動（計７回、参加者約 400 名）を実施。
2024 年度は関係者との調整を踏まえた上で更なる収益化を図ることを検討中です。
またファンクラブとして IKKYO FAMILY の運営をスタート。
他の SNS では公開出来ないチームや選手の最新情報を発信するサービスを開始。
OBOG や現役の父兄を中心に有料会員 30 名程度を含む 200 名超の会員獲得に至りました。

事業本部の 2023 年度売上は 128 万円と前年度比＋95 万円の増収となりました。
結果として 50 万円程度をクラブ活動に捻出することが出来、
成長フェーズ１年目としては上々の出来であったのではないかと思います。

①クラブとまちが共に強くなる ②大学スポーツ市場を牽引
③「Captains Of Industry」人材の育成、この３つの中期経営ビジョンを柱に、2024 年度は「スクールの完全事業化」と「学習塾・カフェ・地域広報誌の事業化」を２大プロジェクトとして推進し売上高 500 万円を目標に事業の拡大を推進する計画です。学生自身が新たな事業を企画・推進しマネタイズすることは一橋大学ならではの取り組みであり、酉松会としても全面的にサポートしたいと考えておりますが、７年前の活動停止の反省も踏まえ、学校サイドとの丁寧なコミュニケーションも同時並行で進めていきたいと思います。

優勝祝勝会では、緒方会長の挨拶、橋詰副会長の乾杯の発声、
学生による動画を活用したリーグ戦結果報告、赤星総監督の挨拶、４年生の就職先の紹介、OB の祝辞、父兄のご挨拶、山崎新主将の挨拶、最後に日置副会長の挨拶で祝勝会は終了となりました。

2023 度は神奈川県の大学も加わり、12 チームで２部リーグを戦い、22 試合を 17 勝４敗１分で勝ち点 52 と、２位の日本大学文理学部に勝ち点３差をつけて見事に優勝を飾りました。
得点 67 はリーグ１位、失点 22 もリーグ最少の１位と、攻守ともに安定し他チームを凌駕したシーズンでした。１部昇格は 2017 年度以来の７年振りの快挙です。

OB の祝辞では昭和 30 年卒の石井様、昭和 31 年卒の橋本様、昭和 33 年卒の岩坂様、
昭和 41 年卒の田中様、平成 28 年卒の蓮池様よりご挨拶を頂き、昨年度優勝のお祝いとともに今年度の活躍を祈念する激励のお言葉を沢山頂きました。また父兄を代表して長島前部長と渡邉前主将のお父様よりご挨拶を頂きました。父兄同士の交流が活発で小平グラウンドでのリーグ戦の観戦を楽しみにされているとのお話が印象的でした。学生と OBOG との交流から父兄を含めた多層化が図られたという意味で、ア式蹴球部の新たな形を感じた瞬間でもありました。久しぶりの対面開催での総会、父兄を含めた優勝祝賀会は多くの参加者によるたいへんな盛り上がりの中で終了しました。この場をお借りして参加頂いた皆様、準備に関わった幹事・学生の皆様に御礼を申し上げたいと思います。

最後に代表幹事として一言お伝えしたいと思います。
卒業後１０年以下の若手 OBOG の各種活動への参加が少なく寂しく感じております。
小平グラウンドでの同世代交流戦などの企画を行っていきたいと考えておりますので、是非とも積極的な参加をお願いします。また 10 年後には小平グランドの人工芝の張替えで多額の費用が発生する予定です。
酉松会会員の皆様には今後ともア式蹴球部へのご支援を是非ともよろしくお願い致します。

2023年度 第1回関東大学サッカーリーグ戦
東京・神奈川 2部優勝 祝勝会

2023年度 第1回関東大学サッカーリーグ戦
東京・神奈川 2部優勝 祝勝会
CHAMPIONS

岩坂朔郎（昭 33 卒）
石井 徹（昭 30 卒）

橋本昭一（昭 31 卒）

2023年度 第1回関東大学サッカーリーグ戦
東京・神奈川 2部優勝 祝勝会

令和５年度シーズン

2023

★主将：渡邉直樹（4）/ 学生監督：近岡 頌（4）
★最高学年：相原昌典 / 大石光誠 / 狩野琳太朗 / 北河耕太 / 木下涼太 / 木村航大 / 工藤稜也 / 小林尚史 / 駒形拓海 / 小松怜平 / 清水一貴 / 杉田 周 / 鈴木元貴 / 長島直紀 / 野口泰人 / 藤村俊輔 / 溝口幸太郎 / 向井友紀 / 山下 諒 / 米凛太郎 / 六角勇人
★MGR：清水真衣（4）

藤村・向井・六角・米・山下・小林尚・北河・駒形・狩野・小松・杉田・近岡
木下・工藤・相原・木村航・長島・渡邉直・大石・鈴木元・野口・溝口・清水一・清水真

【試合メンバー】

FW 相原（4）・工藤（4）・鈴木元（4）・笠置（3）・桑島（3）・齊藤（3）・八巻（2）・西野（2）・三浦（2）
HB 小林尚（4）・向井（4）・渡邉直（4）・五十嵐（3）・森谷（3）・平賀（2）・堤（2）・赤金（2）
BK 大石（4）・北河（4）・木村航（4）・小松（4）・野口（4）・六角（4）・加久保（3）・外池（3）・塚本（3）・山崎惇（3）・安部（2）・篠田（2）
GK 杉田（4）

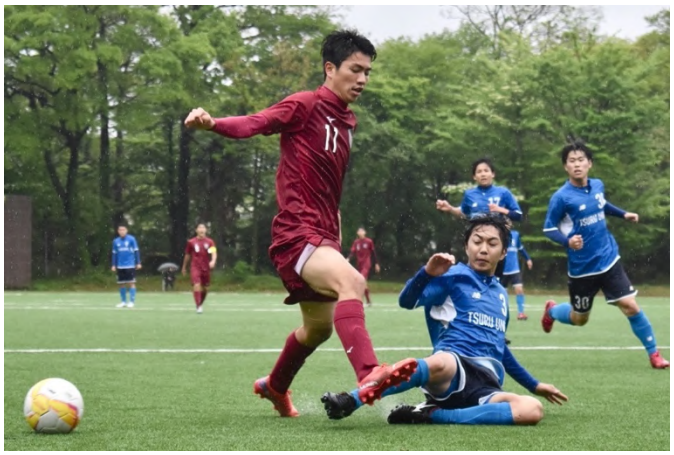
【戦績】 東京・神奈川リーグ２部：優勝　17 勝１分４敗 → １部 昇格

	工学院	神工大	都留文	ICU	都立大	芝工大	防衛大	松蔭大	東工大	日大文理	日大生資
前期	●1-2	●1-2	○3-2	○2-0	○3-1	○2-1	○6-2	○2-0	○5-1	○5-0	○5-0
後期	△1-1	●2-3	○7-1	○4-0	○4-2	○2-0	●2-3	○3-0	○1-0	○2-1	○4-0

＊大学名は左から対戦順

【東京・神奈川リーグ２部 最終順位表】

順位	大学	勝点	勝	分	負	得点	失点	差
1	一 橋	52	17	1	4	67	22	45
2	日大文理	49	16	1	5	66	31	35
3	都立大	43	14	1	7	51	34	17
4	工学院	40	12	4	6	59	25	34
5	日大生資	38	11	5	6	49	40	9
6	神工大	32	9	5	8	38	30	8
7	芝工大	28	9	1	12	47	44	3
8	東工大	27	8	3	11	33	36	−3
9	ＩＣＵ	21	6	3	13	27	53	−26
10	松蔭大	21	7	0	15	22	62	−40
11	防衛大	18	5	3	14	27	61	−34
12	都留文	12	3	3	16	22	−70	−48



リーグ戦を観戦して

⚽ 小平随想

石井　徹　（昭 30 卒）

小平分校地を訪れたのは何年振りであろうか。
以前一橋祭のホームカミングＤの時に一度往訪して其時の現役学生諸君の練習を傍から少し見ていたことがあったが、小平Ｇできちんと応援観戦したのは多分何十年振りかのことであった。山根君や福本君から人工芝化した新装グラウンドを観に行こうと度々声をかけられて気にはしていたが、此所脚の具合が不調で億劫を決め込んでいた。併し10月1日、とうとう山根君が迎えに来てくれることになり、今リーグ戦の山場、日大文理戦を観に出かけた。

道すがら小平市もすっかり市街化が進み、
往年の田園風景は見る影もなく変わり
隔世の感に浸る内に住宅街のさ中、
多摩湖線の旧一橋大学駅前から旧校門に繋がる
一直線のアプローチ路に達した。

試合は終始双方共に前向きの気力と意識がぶつかり合う好ゲームであった。
相手の攻撃は殆ど右側から始まり、時々有効な持ち込みがあったが、受けるサイドのチェックが良く決まり、危ない場面も二、三度あったが守備の頑張りが之を制した。

我が一橋側は攻撃時の好コンビネイションと合わせ技のタイミングが好調に働き、
全体的に四分六分で押していた接戦を勝利に繋げることができた。この程度の相手には中盤でのチャージがもっと有効に働けば、味方チャンスへの展開が更に増えるのではないかと感じた。

秋のスポーツシーズン最中のこの日は、長年応援している FC 東京がガンバ大阪に勝ち（3-0）、
晩にはアジア大会でも日本が北朝鮮に勝った試合（2-1）が放映され、
非常に気持ちが良い１日で、帰宅後独りで乾杯したものだ。

新装なった小平 G は、ある程度の毛足の長さを保ち蹴りやすそうな人工芝が
未だ新しく一面に覆われ、綺麗に緑に映えていた。40 年以上前に就業していた会社のグラウンドを
人工芝化するのに携わったが、その当時とは材質と施工法とがすっかり変わったそうで、
より進歩発達した人工芝グラウンドに仕上がったように見受けられた。日本のサッカーもこの半世紀来、
非常に普及すると共に内容も進歩発展し、又プレイヤーも大幅に増加して来た。今や野球と肩を並べる
メジャースポーツとなっている。

他方、大戦後の学制改革で大学数も急激に且つ広汎に増え、
大学リーグも従って以前に較べて組織が増大したものとなった。又一部にプロ化指向の影響もあり、
技術の向上やチーム力の強化を図るには相当の努力と方策が必要であり、大学リーグ内での戦力の維持は
昔に較べて更なる難しさに直面している。このような現況にあっても我が部は新装なった小平Gを活用し、
我が国社会の充実発展に資する心身健全で前途有望な若人たちが続々巣立ち育ってくれることを
切望するものです。

⚽ 四つの「しんぼう」

橋詰 邦弘 （昭 56 卒） 副会長

2023 年のリーグ戦。開幕から２連敗した時には、どうなることやらと
暗澹たる気分になったが、見事立て直し、優勝を果たしたことを高く評価し、
現役とともに喜びたい。数試合を観戦しただけだが、優勝・昇格にふさわしい戦力だったと思う。
ただ、リーグ編成、チーム構成をみれば、「いなければならない場所」に戻ったとも言える。

１部では技術的にそれほど差はなくても、
球際の競り合い、走力はじめフィジカル、パススピードの水準が一段上がるのは間違いない。
個々のレベルアップはもちろん、ア式蹴球部全体の一体感を持った組織力が試されることになるはずだ。
卒業からこれまで報道の現場に身を置き、そのほとんどを政治取材に費やしてきた。
いくつもの政権が崩壊していく過程を目撃してきた経験を踏まえ、
チーム・組織にとって必要なものを考えてみたい。

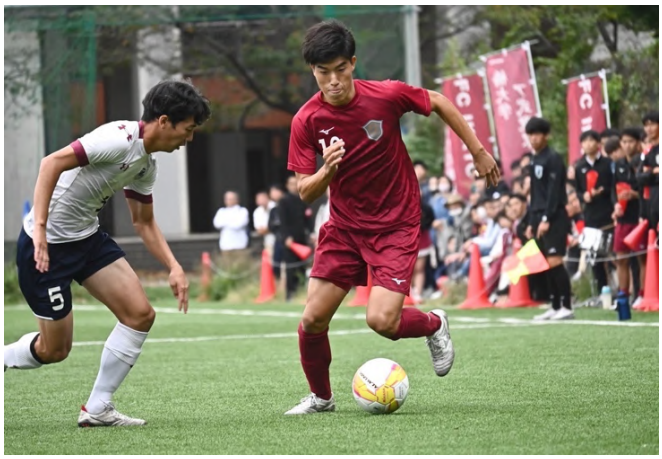
時の政権は「チーム安倍」「チーム菅」「チーム岸田」というように、
チームに例えられることが多い。政権の強靱さはトップである首相の力量に大きく左右されるのだが、
官僚を含め、それを支える体制を構築できるかもカギを握ると言っても過言ではない。
2008 年暮れのこと。当時の麻生太郎首相がリーマン・ショックへの対応に追われ、衆院解散・総選挙の
時期を逸している間に内閣支持率は続落し、自民党内で「麻生降ろし」が、じわりと広がりつつあった。
衆院議員の残り任期が１年を切り、議員が浮足立ち、不人気の顔では選挙を戦えないという悲痛な声は
理解できなくもない。ただ麻生氏はその年の９月の総裁選で大勝したばかり。さすがに党や内閣の要職を
務めた経験もあるベテラン議員が、“政府、自民党に「しんぼう」がなくなってしまった”と戒める。

この時、彼が挙げた「しんぼう」は、
独楽が回る中心の「心棒」と、我慢してボスを支えていく「辛抱」だったが、
後日、彼と話した際に、「しんぼう」には、あと２つ大切な意味がある、と伝えた。
信用と人望を表す「信望」、さらに事を成すための戦略とも呼ぶべき「深謀」だ。
この四つの「しんぼう」が、どんな組織にとっても不可欠な要素と言えるのではないか。

それはア式蹴球部というチームにも当てはまる。
中心となるべき存在はもちろんのこと、そのリーダーには部員たちの信望が欠かせない。
どんなに苦しくなっても、自分たちが日々の練習でやってきたことを信じて耐える力が求められる。
いざ試合となれば対戦相手を徹底的に分析して戦術を練り上げる。
四つの「しんぼう」を備えたチームは強いはずだ。

政界には、もう一つ「格言」がある。
これは小泉純一郎元首相もよく口にして、聴衆を笑わせた。
“政界には三つの坂がある。**上り坂**、**下り坂**。そして三つ目が**まさか**だ。”
長丁場のリーグ戦でも、試合中でも、想定外のことは起こり得る。
それに対処する準備を怠らないことがリーグ戦の成績にも直結すると思う。

余談になるが、
私がサッカーの指導者ライセンスを取得した際の筆記試験に「指導者の条件」が出題された。
正解は、①情熱 ②誠実さ ③オープンマインド ④忍耐力 ⑤知識力 ⑥モチベーションを高める能力
⑦一体感 ⑧決断力だった。政治の世界にも、一般社会にも、相通じるリーダー・組織論である。



戦いを終えて

⚽ シーズン総括・今後の展望

近岡　頌　（4年 学生監督）　東京・麻布高

2023 シーズンはアミノバイタルカップから始まった。
抽選会が行われ、順調に勝ち上がることが出来れば、前年度東京カップで敗れた1部リーグの帝京大学と当たるということで準備にも自然と力が入った。負けたとはいえ手応えを感じ、格上大学と試合をする喜びを知った私たち4年生にとっては、アミノバイタルカップが1部リーグの相手と真剣勝負をする最後のチャンス。都リーグ全体に自分たちの存在を力強くアピールしたいという大きな野心を持って大会に参加した。

1回戦に勝利し、2回戦で帝京大学と試合をすることに。
両チーム共に応援部員が多く集まり、4年間で最もボルテージの高い試合だった。結果は90分を通して1-1、PK 戦の末勝利。憧れていた1部リーグのチームに勝利し立っていられないほどの喜びを感じた。
3回戦では学習院大学と戦い1-2で敗れた。下位リーグの私たちに対しても気を抜くことなく、勝利に拘り、私たちの良さを殺してきた彼らは強かった。1部リーグのチームの本当の強さに触れた気がして、ある種の絶望感を感じた。東京カップとアミノバイタルカップを通して1部リーグのチームと戦わないと得られない喜びや悔しさがあると感じ、昇格を強く意識してリーグ戦の開幕を迎えることになった。

しかし、リーグ開幕2連敗。
アミノバイタルカップを通して醸成された期待感は、あっという間になくなってしまった。
3月には格上チームとの試合が多く、外発的要因によってモチベーション高く、一体感を持って活動できていたが、4月に入ると肉体的にも精神的にも燃料不足状態であった。相手のレベルも変わり、ほぼ全試合で勝利が求められるようになり、ナーバスになることが多かった。3節の都留文科大学戦で初勝利をおさめたが、セットプレイから2失点を許し、消化不良感が残る試合だった。今までそれほどの苦労もなく勝利できていた相手に苦戦し、この先の展望に不安が募った。しかし、イップス状態から抜け出すためには必要なステップだったのだろうと後から振り返り感じている。

1節：vs 工学院大学　●1-2

2節：vs 神奈川工科大学　●1-2

5 節の都立大学戦は大きなターニングポイントとなった。
近年対戦成績が悪く苦手意識を感じていた相手に対して、3-1 で会心の勝利を収めることができた。
全勝で好調の都立大とアウェーで高いパフォーマンスを発揮できたことは大きな自信となり、
再び大きな野心を持って進めるようになった。7 連勝で迎えた首位日大文理学部との試合も 5-0 で
勝利することができ、前半戦を首位で折り返すことができた。

前半戦の好調の背景にはトランジション局面の向上が挙げられる。
ビルドアップやプレッシングの練度が高まり、ポジティブトランジション（守から攻に切り替わる瞬間）や
ネガティブトランジション（攻から守に切り替わる瞬間）をオーガナイズされた状態で迎えることができ、
常に効果的にアクションを取れるようになった。グループ戦術の安定は試合の大半をコントロールする
ことにつながり、成績の安定につながった。これらは自然と自分たちのスタイルとなり、
パフォーマンスの質を評価するバロメーターとなった。

後半戦は 2 試合勝ちなしからのスタートになるものの何とか立て直し、首位でラスト 5 試合を迎えた。
そして 20 節の東京工業大学戦を 1-0 で勝利し、多くのサポーターの応援の前で 1 部昇格を決めた。
昨年の関東 3 部リーグ創設に伴う都リーグ再編のタイミングで昇格することができず、
今年こそ 1 部昇格を必ず成し遂げたいと考えていたので、とても嬉しかった。

リーグ戦の行方を決める重要な一戦となった 21 節の日大文理戦は、両チームの関係者が多く集まり、
異様な雰囲気での試合となった。相手の圧倒的な攻撃力に押し込まれる展開が増えたものの
サポーターや応援部員の声援を背に相手の攻撃を跳ね返し、何度かゴールにアタックすることができ、
終盤は押し込まれてしまったが、なんとか 2-1 で勝利を掴むことができた。試合終了の瞬間の興奮や
歓声は忘れることはできない。またこれほど一体感を感じながら試合をした経験はなく、
これまで一生懸命取り組んできた褒美なのではないかとも感じた。

最終節の日大生物資源科学部との試合では、自分たちらしいダイナミックなプレイを披露できた。
4 年生も多く出場することができ、多くの選手にとって集大成にふさわしい試合になったのではないか。
また多くの OBOG の皆様と優勝の喜びを分かち合うことができ、とても美しい日となった。
かねてより目指していた圧倒的な、誰もが認めざるを得ないような優勝とは少し離れてしまったが、
22 試合という長期戦において継続して努力し続け、夢を叶えることができた自分たちを誇らしく思う。

４年間を振り返ると、１-２年時は戸田さんのサポートとして、３-４年時は学生監督として部の最前線で関わらせていただいた。戸田さんのチームへの参画、人工芝グラウンドの完成、その後の継続的な努力によって、我々の競技環境は都リーグの中でもトップクラスに恵まれていると感じている。指導体制やグラウンド環境の充実は練習の質の向上に直結し、「洗練された集団戦術」という形でチームの強みとして現れている。

一方で、都リーグの他大学も環境づくりに力を入れていることは確かだ。
監督・コーチ・トレーナーの充実、分析官の導入、グラウンドの整備、選手リクルートの強化など多岐に渡り大学の援助や強固な OB 組織といった高い組織力を有する大学は、ますます力をつけている。選手層の厚さや資金力で他大学に劣ることが多い弊部が現状維持で留まると、他大学に遅れをとることは明らかだ。昨年２部から昇格したチームは、今年の１部リーグで苦戦を強いられている。東大は７位、武蔵大は９位、成蹊大と理科大は再び２部に降格した。現役部員は１部リーグが厳しいチャレンジであることを強く自覚して懸命に取り組んでいると思うが、私たち OB もその感覚を共有し、中長期的なチームの強化につながるようなサポートを粘り強くしていく必要があると感じている。

最後に個人的な挨拶で締めさせていただきます。
先日は如水会館にて優勝と昇格を祝う会を開催していただき誠にありがとうございました。
今まで中々お会いする機会が無かった諸先輩方にお会いし、昇格や優勝の喜びを分かち合うことができ、また日頃のお礼を伝える機会にも恵まれ、とても嬉しかったです。会に参加してくださった方の熱量は私の想像を遥かに上回るもので、みなさんの熱い想いに現役時代には十分に気づけなかったことを恥ずかしくも感じました。それと同時に多くの方々に期待していただきながらプレイ出来ていたことはこの上なく幸せなことであったと感じています。また何度も大舞台で試合ができたことは、かけがえのない経験となりました。うれしいこと、幸せなこともたくさんありましたが、それと同じくらいうまくいかないこと、悔しいことも多かったですし、皆さんを悲しませてしまったこともあったと思います。それも皆さんのサポートのもと懸命に取り組んだからこその結果であり、全ての感情や学びとの出会いに心から感謝しています。今後は一人のサポーターとして、現役部員が一生懸命取り組める環境づくりに寄与していきたいと考えておりますので、引き続きよろしくお願い致します。

⚽ 目に見えるものが全てではない

渡邉 直樹 （4年 DF 主将） 東京・暁星高

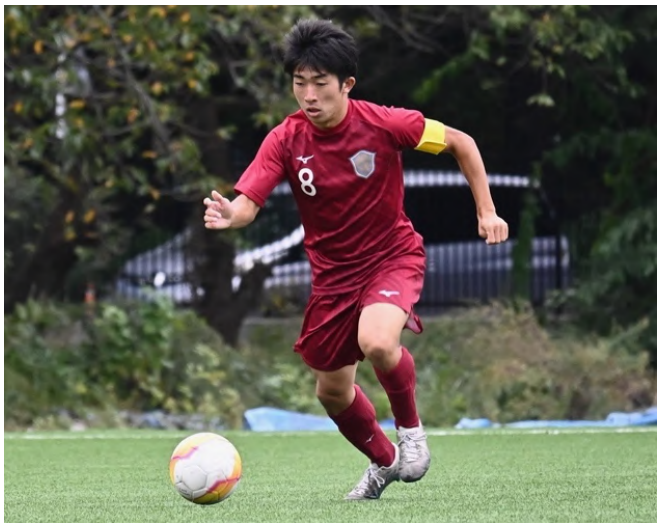
最高学年で２部リーグ優勝と１部リーグ昇格を達成できたことは
大きな喜びであるのは間違いないが、ア式蹴球部での活動における全てがそこに
詰まっていたとは思わない。優勝や昇格という目標をこれまでのア式蹴球部が掲げ続けてきたこと、
自分が一緒に活動してきた先輩もその目標に向かって必死に取り組んできたこともよく知っているが、
それを達成することだけが自分たちの全てではないと思う。

現在のア式蹴球部では多くの部員が様々な領域で活躍することができる。
それは誰かから与えられた領域かもしれないし、もしくは自分から希望した領域なのかもしれない。
主体的にも受動的にも活躍するチャンスが与えられると言うことができる。部に入ったばかりの１年生
ですら部のために活躍できるチャンスがある。今の自分たちの体制にあまり納得していない OB の方や
１部リーグ昇格や２部リーグ優勝という目標を明確に対外的に押し出していないことを不思議がる
OB の方がいることは分かっているし、そのこと自体を否定したいとも思わない。だけど今のように
リーグ戦以外でも部員の活躍の場があるというのは、部員が様々なフェーズや時々の状況で、
何かしらの目標を持って活動できるということであると思う。

コロナの世代ということもあり、環境的にも大きく変わった代だった。
普通であれば経験できていたこともできなかったと思う。試合で応援できるようになったのは３年の
終わり頃からで、OBOG や保護者が試合に見に来られるようになったのも４年生の頃からであった。
寄付周りに関しては 10 月直前の引退間近になって、初めて実際にお会いして話をすることができた。
コロナ禍時代の酉松会新聞の記事を見てみると、当時の部員の思いが詰まっていて状況がよく分かる。
その中に、１部リーグ昇格を達成することができなかった最後の１年間の活動は意味がなかったと
綴られているものがあった。最高学年時に昇格を経験できた自分が言うのは説得力がないかもしれないが
例え昇格できなかったとしても自分たちの活動はとても意義のあるものだったし、実りあるものであった
と胸を張って言えると思う。

ア式蹴球部は活動的にも部員の心情や価値観的にも、
数年や十数年といった短いスパンで大きく変わっていく。今このように書いていることも、未来の部員に
とっては少し風変わりで偏った意見になっているかもしれない。全ての代においてア式蹴球部の核に
なっている伝統的な部分は残しつつも、その周りにある物事は、その時々の活動や部員によって変化し
続けるというのがいいのではないかと思う。今後自分が OB としてア式蹴球部の活動を見聞きすることに
なった時、自分の想像を超えるような面白くワクワクさせる取り組みを、サッカーでもサッカー以外の
領域でもするような組織になっていると嬉しく思う。

と言いつつも、やはり関東大学リーグ編成の変化ということがあったにせよ、
2 部リーグ優勝と 1 部リーグ昇格を達成した代の主将になれたことは本当に嬉しく思う。特に印象に残っているのは開幕からの２連敗。アミノバイタルカップで良い結果を残せていただけに、とても辛いものだった。こういう時に出てくる敗因としては「油断」というものがある。たった 2 文字で片付けてしまえる魔法の言葉だ。油断をしていたわけではないと思うが、気づかない所で油断しているのか・・未だによくわからないが、「細部にこだわることができなかった」というのが大きな理由だったと振り返って思う。勝った時には誰もあまり見ようとしないが、負けた時には誰もが嫌でも自分やチームの行動を振り返り反省点を探す。そういう意味で負けというものは勝ち点はついてこないが、大きな価値があると言える。主将として非常に辛い時期だったが、そんな時でも自分を支えてくれ共に戦ってくれた OBOG や保護者、先輩、同期、後輩の全ての人に感謝をしたい。OBOG の皆さんにはこの 4 年間、特にラストの 1 年間は多くの部分で支えていただきました。今後は自分がもらった以上のものを、これからのア式蹴球部に還元していきたいと思います。



⚽ ア式の４年間を振り返って

大石 光誠 （4年 DF） 東京都市大学附属高

OBOG・保護者の方をはじめ一橋大学ア式蹴球部に携わってくださった方々に心より感謝致します。コロナ蔓延という未曾有の危機にもかかわらず、４年間プレイできたことで人生の財産とも言える時間を過ごせました。本当にありがとうございました。

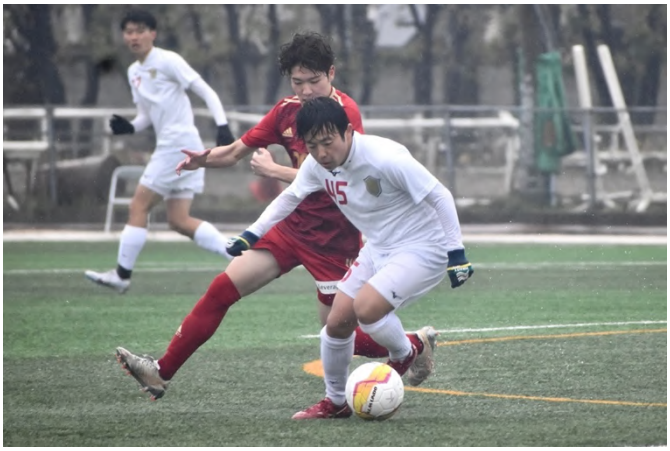
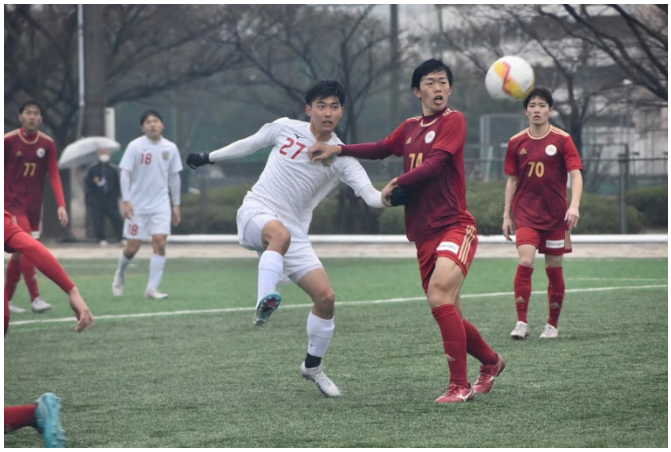
ア式で過ごした４年間、終わってみれば、あっという間でした。
週５回の練習はもちろん、週末の試合、練習後の飯、年２回の飲み、どれもかけがえのない思い出です。
そんな中で、一番思い出に残っている瞬間があります。それは 2023 年２月 19 日、私の 22 回目の誕生日の時に行われた三商戦での出来事です。A トップと A サブの２チーム編成（総勢 30 名ほど）で大阪公立大学に向かいました。2021-22 年はコロナ禍により中止していたため、私にとって最初で最後の三商戦でした。そして大阪公立大学との試合で２年連続のバースデーゴールを決めたのですが、それよりも思い出に残っているのが、１時間半にも及ぶ地獄のアップです。

２月という１年で最も寒さが厳しく、それに加えて冷たい雨が降り注ぐこの日、
A サブとして参加した私は、A トップが神戸大学と試合している間、90 分間アップをし続けました。
ゴール裏の狭いスペースしかなかったのでボールが使えず、ひたすらステップを踏み続けました。
体が寒さでおかしくなり、謎にテンションが上がり、声を出しまくり、死ぬほどキツかったけど
あの時以上に A サブの結束が強まった日はないと思います（笑）。

vs 神戸大学 ○ 1-0

ちなみにここだけの話ですが、
ヘッドコーチの木室さんも学生コーチをしていた狩野も、あまりの寒さに中止すべきと言ってました。
それくらい大変な 90 分でしたが、終わってみれば 1 番の思い出です。一緒にアップをしたみんな、
あの時は本当に楽しかったね。あの出来事が今の私を作っていると言っても過言ではありません。
後輩のみんなは寒い中でアップすることになっても、文句を言わないようにしましょう。
その体験があなたを強くします。社会人になっても、寒さに負けず頑張りたいと思います。

vs 大阪公立大学　△ 1-1　・・ 1 位 神戸大学 / 2 位 一橋大学 / 3 位 大阪公立大学

⚽ 頭蓋骨骨折

狩野 琳太郎 （4年 STAFF） 群馬県立沼田高

私は２年時の 11 月に頭蓋骨を骨折した。
2021 年リーグ最終節を翌日に控えた最後の調整。フルコートでのロングボール
対応の確認。紆余曲折ありながらもスタートメンバー入りした私は右の CB で構えていた。
猛り立つ私の待ち構える最終ラインに向かって、六角が敵陣からロングボールを蹴り込む。
放たれたボールは綺麗なバックスピンでやや緩やかに進み、空中で次第に速度を落とす。
思ったより伸びない。そして私の左前方、その距離 10ｍ弱だろうか、
なんとも微妙な場所をめがけて落下してくる。自分がチャレンジするべき範囲ではないな、と
カバーに向けて一歩下がろうとした瞬間、自分の名前を左 CB のマー坊さんが呼ぶ。
気づいたときにはロングボールを収めようとする春平さんに頭から突っ込んでいた。

無謀なチャレンジが招いた不要な怪我だったことは、一聞にして明白と思うが、
翌日の試合に向けて奮起する私が、自らの任されたボールをみすみすと落とすわけがなかった。
“これを落としたら終わりだ”と思った。結果、選手としての命を落とすこととなったわけだが、
原因となったチャレンジ自体は特段後悔していない。“頭蓋骨を折ったことがある”と話すと
飲みの場で人の気を引くことができるし、就活時には有用なネタとなったので。と、冗談はさておき、
熱い想いがあったとて気持ちばかりを先行させて冷静な判断、緻密な準備をないがしろにしていては、
物事はそう都合よく実を結ばないのだなと、まさに身をもって学んだわけである。

⚽ ア式という組織の大きさ

工藤 稜也　（4年 FW）　東京・城北高

初めに、４年間多大なるご支援・ご声援を頂いた OBOG の皆様に心より感謝申し上げます。私自身、FRM 事業部という立場で活動をしていたため、有難いことに他の部員に比べて多くの場で OBOG の皆様や保護者の方々と関わらせていただきました。皆様のア式に対する熱い思いを肌で感じられたからこそ、試合で良いパフォーマンスを発揮できた場面も多かったと思います。本当にありがとうございました。この４年間で出場した数多くの試合の中でも、皆様のパワーを最も実感した３年時に駒沢公園で行われた商東戦について振り返りたいと思います。

私たちの代はコロナ真っ只中の時期に入学し、１-２年時に行われた試合はすべて無観客試合でした。その当時は OBOG の皆様や保護者の方々の声援はおろか、部員の応援すらも認められていなかったため正直物足りなさを感じていました。そのような環境の中で、ア式に入部して初めて行われた有観客試合が３年時の商東戦でした。この試合の開催に向けて尽力してくれたスタッフや部員みんなのおかげで当日は何百人もの観客の方々に集まっていただき緊張もありましたが、それ以上に気合いを入れて試合に臨めたことを覚えています。試合中もひとつひとつのプレイに対して歓声が湧き心の底から楽しみながらプレイできました。そして皆様の声援のおかげで私自身幸運なことに決勝ゴールを決めることができ、改めてア式という組織の温かさを感じられました。勝利という形で少しでも恩返しができていれば嬉しいです。この試合は、間違いなく大学サッカーの中で最も楽しむことができた試合であり最高の思い出です。

商東戦をはじめ、ア式での活動を振り返ると、
この部の歴史の深さや OBOG の皆様の偉大さをひしひしと感じます。
今後はア式を支える立場として少しでも皆様のような存在に近づけるように尽力したいと思います。
今後ともよろしくお願い致します。

⚽ 食事 LINE について

清水　一貴　（4年 MF）　愛知・刈谷高

皆さんは「食事LINE」をご存じでしょうか。
私がア式に入部した際、一番衝撃を受けたのが、この食事LINEの存在です。
徐々にその存在に疑問を抱かなくなりましたが、振り返ってみると何とも奇妙で面倒な制度です。

食事LINEとは、毎日朝昼晩の３回、自分がした食事の写真を、
決まった時間までに５-８人ほどのグループLINEに送信しなければならない制度のことです。
グループの構成は各学年１-２人で年に数回再編成されます。グループには食事をチェックする
人がいて、食事内容が目に余る場合、その人から指導が入ります。具体的な指導内容は、
“タンパク質が足りていない”、“緑黄色野菜を摂取するように”などです。
また時間内に食事をあげない場合、メンションされて注意を受けます。聞くところによると
この制度は2014年頃から始まったそうですが、私たちの代である2023年に消滅し、
10年の歴史に幕を閉じました。

入部当初は、食事をするたびに写真を撮ってグループに送信する手間や、
そもそも自分の食事内容を晒すことに対して抵抗がありましたが、不思議なことに１か月もすると、
嫌な感情はとうになくなっていました。慣れてしまえばただの作業です。しかしよく考えると、
いや、よく考えなくても面倒くさい制度です。食事を送信する方も、チェックする方も煩わしいこと
この上ありません。実際、廃止を求める声はちらほら聞こえていました。食事LINEを廃止するか
どうかの議論はこれまでに何度もあったかと思いますが、きっとその度に“別にやめる理由もないし、
まぁいいか”と結論づけていたに違いありません。確かに食事管理は部としてはやった方がいいですし
慣れてしまえば大した労力でもありません。そんな考えのもと、だらだらと存続してきたのでしょう。

ここまでの文章を踏まえると、私は食事LINEなんてない方が良かったと思っていると
受け取られるかもしれませんが、そんなことありません。卒部した今、食事LINEは私のア式生活を
語る上で欠かせないものとなっています。カレーばかり食べていることを指摘されたことも、写真の
使い回しがばれて注意されたことも今となってはいい思い出です。高校時代を振り返っても、テストで
赤点をとったら坊主というルールや、試合で活躍した選手に一発ギャグをさせるといった悪習とも
呼べるものがありましたが、案外そういうものほど記憶に残っているものです。今後ア式に入部して
くる人たちは食事LINEという面倒極まりない制度を経験しないと考えると、羨ましいと同時に
どこか寂しい気もします。

きっと、今後も様々な文化や制度が生まれては消えていくことでしょう。
現在、ア式にはいくつかの文化や制度がありますが、その中でも特に私が興味を持っているのが、
「追いコン」です。４年生を追い出すコンパのことです。各学年１人か２人ずつ集まり、食事や
アクティビティを１日中楽しみ、費用は全て４年生が支払い、後輩が４年生にプレゼントを渡すのが
慣例になっています。 果たして10年後、「追いコン」は存続しているのでしょうか。気になります。

１年時によく通った国立『サハラ』のカレー

４時間の座学

杉田　周　（4年 GK）　県立千葉高

まず 2021 年 1 月上旬。千葉県内のレンタル会議室。先輩 GK２人と、
当時ア式の監督だった戸田さんと共に、４時間ぶっ通しの座学を受けた。
テーマは勿論「GK」。教壇（代わりのスクリーンの前）に立ってくれたのは、とあるプロの GK コーチ。
キャンプの直前準備に追われるなか、貴重な時間を割いてわざわざ会って話をしてくれた。そして、
自分にとってこの日の４時間が、競技者として１段上に登るトリガーになってくれた。

座学の中身はいたって教科書的でオーソドックス。
① GK のプレイを細分化・体系化し、② 各プレイをどう鍛えるかというミクロな視点での
トレーニング作成法を学び、③ 1 週間や 1 ヵ月というマクロな視点でのトレーニングの組み方を学ぶ。
特に ① がもたらしてくれた恩恵は大きかった。プロの世界で素晴らしいとされる GK はたくさんいて、
そのプレイスタイル、つまりゴールを守るという単一の目標へ向かう手段は十人十色だ。けれど、
アマチュアを地で行く自分にとって、我流の色を進むのはおそらくナンセンス。だからこそ、バルサの
GK テアシュテーゲンを始めとしたドイツ勢の色を教えてもらい、その色を裏打ちする体系化された
理論も教えてもらい自分の中で正解を確立できたことが、上達への小さくも確かな 1 歩になった。

言うまでもないけど、実際に上達したのは実践もあってのこと。
トレーニングの作成に趣向を凝らし、トレーニング実施中も改善の余地を見つけては、ああだこうだと
口に出し、撮った映像をチェックする。こうしたサイクルを回し続けることなく上達することはない。
ただ自分の中に正解を確立していなかったら、こういうサイクルを回すことすらままならなかっただろう
と考えると、やっぱりあの４時間の座学には字面で表現する以上に大きな意味があったと思える。

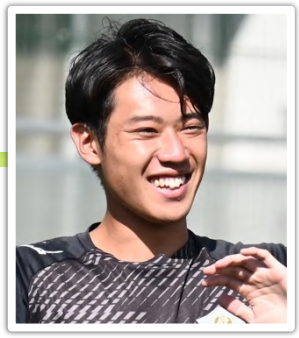
⚽ 最高のア式生活を振り返って

野口 泰斗 （4年 DF） 東京・小石川中等教育学校

まず始めに、OBOG・保護者の皆様、４年間多大なるご支援とご声援を
ありがとうございました。 多くの支えのおかげで最高のア式生活を
過ごすことができました。ア式生活を振り返って、自分が全力で部活に向き合い、
楽しく過ごせたのには２つ理由があると思います。

１つ目は、仲間の存在です。
部活内では真剣にサッカーに向き合い、部活外ではくだらない話やじゃんけんで盛り上がる。
そんな仲間がいたから４年間めげずに部活を続けることができました。
本当に信頼できる関係というのは、楽しい思い出をどれだけ共有したかよりも、
辛い経験をどれだけ一緒に乗り越えたかによって形成されると思います。その点で、
ア式で出会った仲間たちは、今までもこれからも自分にとってかけがえのない存在であると思います。

２つ目は、OBOG・保護者の存在です。
特に保護者の存在は大きく、親への感謝は常に忘れるべきではないと思います。
自分の親は自分がやりたいと思った事、正しいと思ったことを全力でやってほしいと
いつも応援してくれました。そして自分が不自由なく部活に取り組めるように、
生活面でも金銭面でも応援面でも全力で支えてくれました。
日常のことだから忘れてしまいがちだけれど、部活を引退して怠惰な生活をしながら
部活時代を振り返ると、親の偉大さに気づくようになりました。
これから社会人になり、恩を少しずつ返していけたらと思います。



⚽ B チームコーチとして

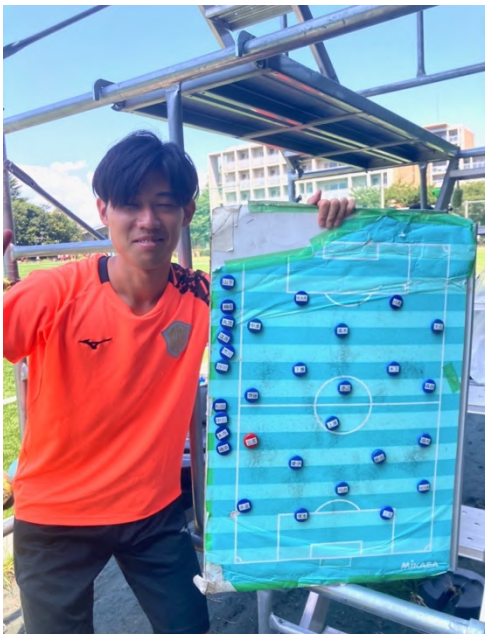
藤村 俊輔 （4年 STAFF） 宮城・仙台向山高

引退してから早５ヶ月が経ちました。
６時には目が覚めるような習慣も抜けてしまいました。卒部ブログを書いたり、追いコンをしたり、祝勝会を開いていただいたり、気持ちの整理もついたので、今一度、自分のア式生活を振り返ってみようと思います。

ア式では B チームのコーチとして２年間活動させていただきました。
その経験が自分にとってかけがえのない財産であることは間違いないです。B チームならではの苦悩を共にした仲間に出会えたこと、組織の中で大きな責任を持って活動させてもらったことは、確実にこれからの人生にも活きる大切な経験だと思います。その一方で自分のやってきたことは何だろうと思う感情がふと湧き上がりました。２月に大学院の入試がありました。結果は不合格で現在は９月入学を目指して浪人の身になりました。すべて言い訳ですが、一人暮らしでグラウンドからも遠く、B チームのコーチとしてのタスクもあり、ア式として生活するので手一杯で勉学はサボりっぱなしでした。それがそのまま結果として出てしまい、半年もしくは１年の足踏みが確定しました。

また祝勝会では同期が華々しく称えられる様を横で見せられました。とても誇らしい一方、少しジェラシーを感じました。もちろんリーグ戦に直接貢献したわけではないですし、自分がその立場だったら成し遂げられる自信もないです。それに褒め称えられるために B チームのコーチをやっていたわけでもないです。ただ、ア式に残せた物は何もないんじゃないか、これまで自分が注いできた時間や情熱はどこへ行ってしまうんだろうか、そんな感情が湧いてきました。ネガティブな文章になりましたが今の自分の心持ちもア式に対しても全く負の感情はありません。初めにも書きましたが、自分が何をしたか、様々な苦難を乗り越え、かけがえな仲間と出会った、それが最も大切なことだと思います。
今回の苦難もサボってきた４年間を取り戻すための基礎を固める時間にして次の試験に合格し、半年後には大学院生として研究に全うできるようにしようと思います。

このようなかけがえのない経験ができたのも
日頃から支えてくださる OBOG の皆さまのおかげです。
誠にありがとうございました。今後は皆さまの一員として、
現役部員が目一杯活動できるようにサポートする側に回ります。
次の 100 年に向けて発展を願う気持ちは同じですが、
皆さまには我慢強い応援をお願いしたいです。
特に今シーズンは厳しい戦いが待ち受けていると思います。
なかなか目に見える結果として現れないかもしれないです。
それでも、リーグ戦を戦うメンバーはもちろんですが、
普段皆さまの目には届かない B チームで活動している
選手たちやスタッフ、マネージャー、全ての現役部員たちが
できることを必死にやっていることでしょう。
その姿を暖かく見守っていただけると幸いです。



⚽ リーグ戦初出場

向井 友紀　（4年 MF）　県立静岡高

私にとって４年間で１番印象的な出来事は、
リーグ戦最終節で４年生にして初出場を果たした瞬間です。
表立って主張したことはありませんでしたが、ずっと出たいと思っていましたし、
実際途中交代で入ってプレイしてるときは、想像よりずっと楽しかったのを覚えています。
見てる人たちがすごい応援してくれるのがとても嬉しかったです。
出場を叶えてくれた色んな人に感謝しています。
同時に、このような舞台にもっと早くから立っていた人たちは本当にすごいと思いました。
自分とは差があったのだなと感じさせられました。
ただ、自分のように遅くタイミングが回ってくるのも悪くないような気もします。
出場した瞬間の喜びも大きいし、その舞台の神聖さみたいなものも持ち続けられます。
とにかく色んな人に支えられて成長できた良い４年間でした。

⚽ 2023 年度のリーグ戦

六角 勇人 （4年 DF） 東京・三鷹中等教育学校

今回は私が司法試験予備試験に向けた対策をするために休部する前までの
リーグ戦に触れながら流れに身を任せて記述した文章を寄稿したいと思う。

2023 年シーズン、私は２試合に出場した。
第１節の工学院大学戦と第３節の都留文科大学戦である。かなり入念に準備したつもりであったが、
第１節の出来は本当に酷いものであった。今までア式生活で出場してきたどの試合と比べても酷いと
言えるような出来だったと思う。確かこの試合に出場する前には休部を決めていたので、自分が出られる
残り少ない試合のうちの１試合であるということも踏まえて、非常に不甲斐ない気持ちになったことを
覚えている。とにかくやりきれない気持ちになった。

その後、第２節はベンチには入ったものの出場はせず、
チームもまさかの２連敗をして、正直雰囲気は最悪だったと思う。そして第３節、都留文科大学戦。
この試合を迎えるまでの１週間のパフォーマンスは自分の中でも１、２を争う良さだったと思っている。
理由は明確にはわからないけどなんか良かった気がする。火事場の馬鹿力というものなのかもしれない。
そして試合。なんとか勝った。３ - ２ 。相手を卑下するわけでは決してないが、ここまで肉薄するべき
試合ではなかったとは思う。だからものすごく喜ばしい感情になったというわけではなかった。
ただ勝ち点３を積み上げられたことに安堵したことは間違いない。自分自身としても、自分がいるうちに
１回も勝てないなんてことにならなくて良かった。

第１節の工学院大学戦から第３節の都留文科大学戦まで、感情の起伏がすごい３週間であった。
最悪でやるせない感情から始まり最終的に安堵するところまで、いろんな感情を短い期間に味わいながら
なんとかやり切ることができた、そんな３週間だったと思う。そして休部後、令和５年度の司法試験予備
試験の対策をして、2024 年２月１日、やっと合格を成し遂げることができた。このあまりに長すぎる
試験において、自分自身が勉強を継続的に頑張ることができたというのはもちろんあるが、それ以上に
周りの支えが大きかった部分があると思う。ア式に関して言えば、休部を受け入れてくれたこと。
チャレンジを応援してくれたこと。そんな風土があったからこそ不必要な心理的な負担を負うことなく
勉強に集中することができたのだと思う。

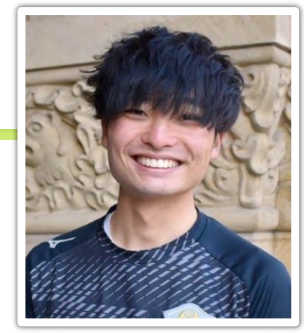
今後は企業法務、特に M&A / コーポレートを専門分野とする弁護士になりたいと考えている。
ア式で学んだ様々なことを活かして、一人前の弁護士になるべく精進していきたい。
そして、自分が学んだこと・やりがいを社会に還元していけるような弁護士になっていきたいと思う。
まとまりのない文章となってしまったが、以上を持って私の寄稿を締めくくりたい。
末筆となるが、ここまで私たちの活動を支えてくださり誠にありがとうございました。

下北沢の居酒屋にて
「サ式」数名＋「コ式」皆川先輩と

六角

皆川 開（令５卒）

注）一橋サッカー部を「ア式」と
呼ぶようになった 10 年くらい前から
各年代の卒業生に 50 音順で
「イ式」「ウ式」・・「カ式」という
呼称を付けるようになった。
今年の卒業生は「サ式」、
昨年が「コ式」と呼ばれている。



⚽ 感謝と決意

長島 直樹 （4 年 事業部長） 兵庫県立長田高

OBOG の皆さまをはじめとする一橋大学ア式蹴球部に関わる全ての方々、
日頃より多大なるご支援・ご声援をいただきまして誠にありがとうございます。
全身全霊で向き合い、多くの時間、労力、愛情を注いできたこの部から
卒業する時がきてしまいました。

「学生スタッフ」という新たな役職として入部をし、
事業本部長、部長と前例のないポジションとしてこの部に関わり、クラブの発展に尽力してきました。
口を開けば新しいことやリスクを伴うチャレンジを提案してきた私は、OBOG の皆さまからすると
良く言えば "改革者" であり、悪く言えば "問題児"、そんな存在だったかと思います。
沢山の我儘をぶつけ、大変お世話になってきました。4 年間を過ごし酉松会やア式蹴球部のことを
よく理解できるようになった今振り返ると、多くの無礼や無茶振りを繰り返していたなと、
反省と感謝の思いで一杯です。

皆さまに辛抱強く、愛情深くサポートいただいたおかげで、ア式蹴球部は
この 4 年間で大きく、明確に改革を進め、発展に向けた進路を着実に歩み始めることができました。
競技活動においても、事業活動においても成果を残すことができた 2023 年。
皆さまのご支援の賜物である小平の人工芝グラウンドには、毎試合多くの観客、地域の子どもたちが
集まっています。今や東京都リーグの中で最も多くの観客が集まるチームとなりました。その他にも
ファンクラブの創設やサッカースクールの開業など、クラブの取り組みの幅・規模は増すばかりです。
ア式蹴球部は学生だけのものではなく、選手だけのものではなく、スタッフやマネージャー、OBOG、
保護者、さらには地域住民が関わり合い、繋がり支え合う中で生まれるひとつの "共同体" です。
共同体を構成するファミリーとして、このクラブの発展の足跡を今後とも全ての皆様と共有をしながら
進んでいけることを、部長を務めた身として、強く願っています。

私自身、2024 年度からは「酉松会幹事」と立場を変え、
ア式蹴球部の発展に貢献していきます。皆さまに頂いた沢山の声援と愛情を、度は皆さまと一緒になって
次の世代を戦う若者たちに届けていきます。若手 OB を代表して、この部をさらに盛り上げていけるよう
精進してまいりますので、どうか皆さまも熱くア式蹴球部を応援してください！
改めまして、4 年間本当にありがとうございました。
今後とも、皆さまと共に、力を合わせて、クラブを発展させていきます！

2023 年 12 月 10 日 関東大学サッカーリーグ 東京・神奈川 表彰式

⚽ IKKYO FOOTBALL ACADEMY の軌跡

小林 尚文 （4年 FW） 東京・国分寺高

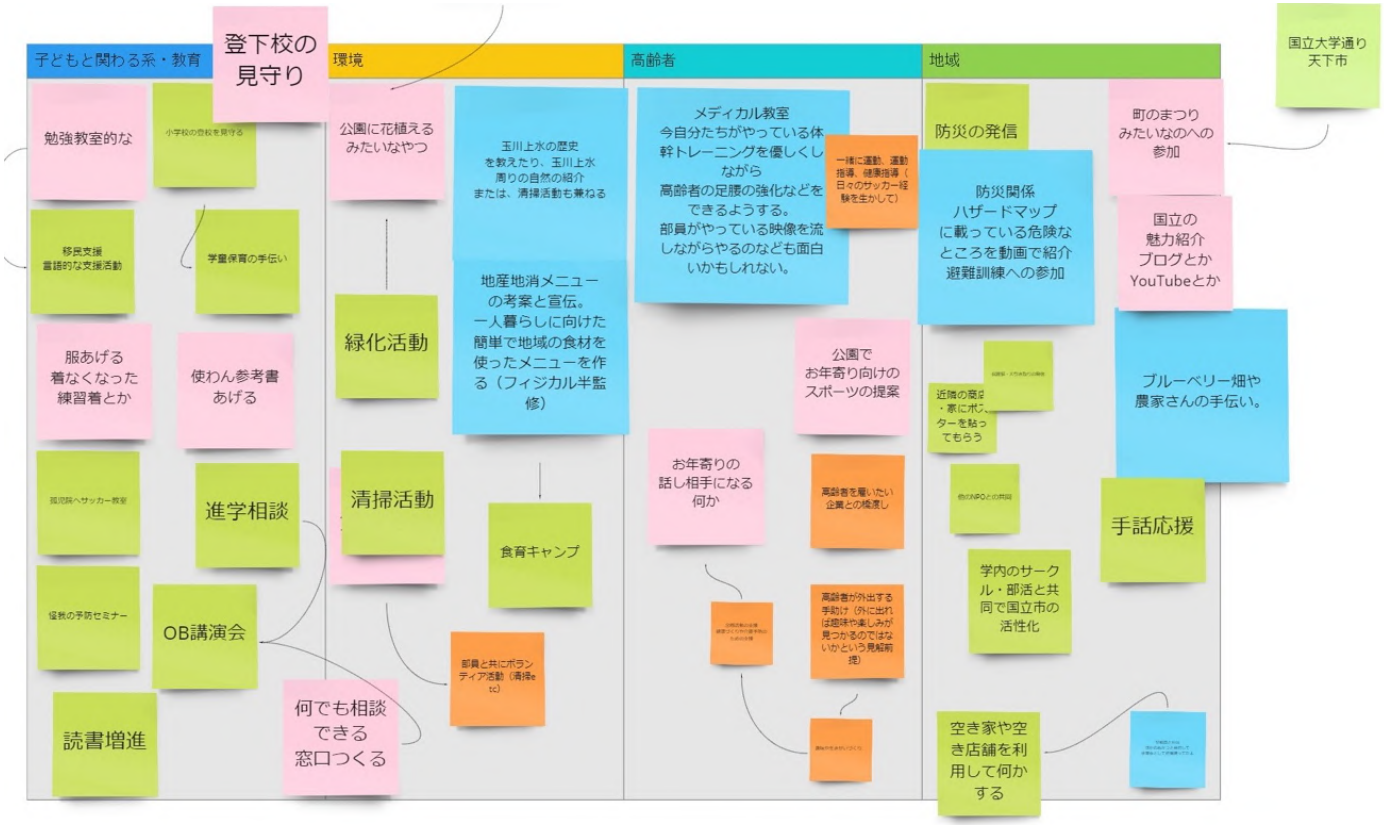
おそらく外部の人たちにとって私はプレイヤーとして見られることが多いだろう。
しかし、ここではプレイヤー以外の側面、事業部として 2023 年度から開始した
IKKYO FOOTBALL ACADEMY を立ち上げた軌跡について書いていきたい。

大学 1 年の頃は、コロナの影響によって地域貢献活動が全く行われていなかった。
以前に地域貢献活動の前身として、小平国際キャンパスで「かけっこ教室」が行われていたと
聞いたが、実際にはグラウンド転貸問題があった時期の禊としての意味合いが強かったらしい。

2019.年 8 月 4 日　第 1 回 「スピード・トレーニング教室」

2 年生となった 2021 年、長島が行った組織改編により事業部の中に
事業部の中に地域貢献部が立ち上がることになって、彼から OBOG 部門か地域貢献部門のどちらかの
メンバーとして参加してほしいとの打診を受けた。当初は“就活にも活かせるかもしれないから
OBOG 部門を担当しようかな”と考えていたが、相談しているうちに都立国分寺高校（国立駅が最寄り）
出身として他の部員よりも長く小平・国立地域と関わってきた自分は地域貢献活動の方が楽しめるし
向いているのではないかと考えた。振り返ると、この決断をした自分に感謝したい。

さて、当初の地域貢献部門のメンバーは私を含め 4 名。
私以外は全員 2 年生以下であり地域との繋がりも何もない。目標とする状態もなければ部門の
存在意義さえわからない。何もかもがふんわりとした状態でスタートしたのを覚えている。とりあえず
“走りながら考えて、小さな成功を重ねよう”というスタンスで、ボランティアセンターを訪問した。
すると、こども食堂、お祭り、雪かき、朝のゴミ出しなど様々な活動をされていることが分かった。
まずは自分たちの存在を知ってもらって、何か困ったことがあれば協力させてほしいという旨を伝え、
ボランティア活動を有志で行っている篠原さんを紹介してもらった。それと同時に国立市・小平市の
課題や自分たちができそうな活動をブレストするほか、他大学の部活動やプロスポーツチームの
地域貢献活動も調べた。



何回もミーティングを重ね、ついに地域貢献部門で初めて活動を実施するときがくる。
篠原さんの協力のもと、国立周りの清掃活動に一橋ア式蹴球部として参加することになった。リーグ戦の後であるにも関わらず 10 枚ほどが参加した。私もリーグ戦フル出場していて体は疲れていたはずなのになぜか清々しい気持ちになった。その後、数回ほど清掃活動を実施した。A チーム主体で清掃活動を実施するときは戸田さんも清掃活動に参加してくださった。よくわからないまま駆け抜けた 2021 年は、ある程度の成果を得て終わることができた。

大学３年時は、正式に自分がタウンコミュニケーション（以下 TC）の責任者となった。
2022 年の課題として挙げられていたのは、TC を有志の集団としてではなくて組織として部員全員に参加してもらえるようにすることであった。その上で自治体からの信頼を得て幅広い活動に繋げていくことを目標とした。宇都宮彩輝が事業スタッフとして入ってからは活動のスピードが上がっていき、継続して清掃活動に参加したり、新入生に向けて国立の紹介動画を作成したりと様々な取り組みをした。中でも私の中で印象に残っているのは駒沢での商東戦の際に計画していた「国立・小平物産展」である。駒沢公園事務所や世田谷区にイベント開催に関する問い合わせをしたり、国立・小平地域の飲食店を 10 店舗ほど誘致したり、感染対策やの食品管理のガイドラインを考えたりと、開催の為に様々な計画を進めた。私はプレイヤーとして当日の運営に参加できないことがわかっていたので、出来るだけ多くの準備を行なった。結果的に中止という結果になったが、多くの人々を巻き込んで目標に向かった経験はかけがえのない財産になった。

３年時の 12 月から３月にかけては就職活動と重なっていたので自分は役職を降り、
宇都宮に任せていたが、無事就活が終わったところで、もう一度 TC の活動したいという旨を告げ、
再び国立・小平地域と関わることになった。新入生が入ってくると事業部スタッフの厚みも増し、
TC 本部も３つの分野に分かれて多彩な活動が行われるようになった。「まちおこしウォーキング」や
「小学校の見守り」「地元のお祭りへの参加」「小平市民招待試合」など、自分が関わらなくても
様々n 地域貢献活動が後輩たちから生まれてくるのを見て、とても嬉しく思った。

一方で、私は TC を立ち上げた時に１つの目標にしていたスクール事業に
主体的に関わることになり、まずはスクール開設の意義や目標を定め周りのサッカーチームを調べた。
また「大学生だからこそ」「一橋生だからこそ」提供できる価値は何かということを突き詰めて考え、
他のサッカースクールとの差別化を図ろうとした。その結果、サッカーと勉強を一緒に行えるような
空間を作るということに決めた。そしてターゲットを選定し、スクールの内容を考え、安全面・保険も
考慮して予算を策定し、運営や集客に関する幾つかの仮説を持ってトライアルを実施した。
残念ながら私は前日に体調を崩してしまい、不参加。

トライアル実施後に行ったアンケートでは、“勉強の時間が１時間でも確保できて良かった”
“人工芝のピッチでサッカーできるのが貴重な機会だった”“また参加したい”など、
好意的な反応が多かった一方で、“レベル感が合わない”“指導方法が曖昧”などの課題も出てきた。
第１回トライアル実施後は、スクール事業を実際に事業として成り立たせる大まかなロードマップを
描いて改良を加えた。そこでの仮説をもとに２回目のトライアルを実施することになり、私はコーチと
いう形で主にキックをテーマにしたスクールを開催した。TC 立ち上げ時の１つの目標だったスクールの
開催を引退目前で実施できて大きな満足感を感じたが、低学年・中学年・高学年の３つのグループを
１時間ずつ担当したので、かなり疲れた。

第２回トライアルを実施した後は、12 月まで毎週スクールを開催することを目標に計画を立て、
スクール生により価値を提供できるように、新たな取り組みを始めた。私は 10 月で引退したので
最初の数回しか参加しなかったが、TC のメンバーを中心にうまく運営してくれたようだ。

何もわからない状態から地域貢献活動を始めて２年半ほどで、
やっとスクール開催を達成することができた。その過程で出会った方々の温かさを、いつも感じていた。
清掃活動をしていると喜んで話しかけてくれ、防災関連の企画やスクールでは小学生がキラキラした目で
体を動かしてくれ、小学校を訪問したときは先生方に温かく迎えられて本当に楽しい経験の連続だった。
改めて地域の方々と TC のメンバーに感謝したい。これからも一橋ア式蹴球部が、
まちとともに発展していくこと、その役割を TC がしっかりと果たすことを願っている。

フットボールのことについても触れたかったが、字数の都合上割愛します。
是非こちらのブログを読んでください。
https://note.com/fcikkyo/n/n30b9557906bc?magazine_key=m989e67bc2951

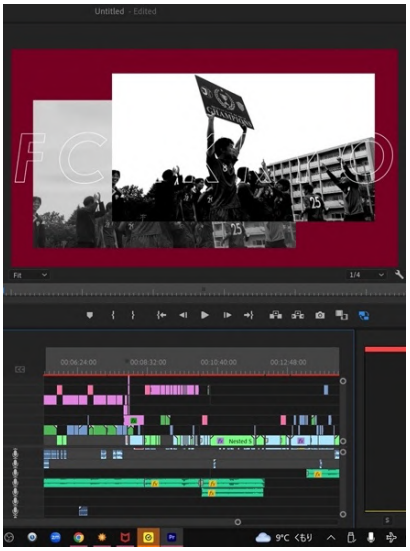
⚽ 動画に残す一橋の魅力

溝口 幸太郎 （4年 STAFF） 千葉・船橋東高

私は３年からスタッフとして入部し、ホームゲームの運営や
フットボールコンテンツの発信といった役割を担当させて頂きました。
動画編集や配信について関心を寄せて頂いたので、こちらについて言及いたします。

一橋ア式は東京都大学サッカー随一のサポーター数と、その熱量を誇ります。
2022 シーズンでは駒沢商東戦で異例の観客数を記録し、2023 シーズンではリーグ戦の小平 12 戦に
1 試合平均 50 名の観客にご来場いただきました。それも OBOG や保護者だけでなく一橋生、地域住民、
小平寮の学生、出身チーム指導者、特定選手推しのファンといった方まで来てくださいました。
このようなサポーターに対してア式は、“もっと観たい、小平に行きたい”と思えるよう、SNS を通して
フットボールコンテンツを発信してきました。この領域は 2018 年前後から先輩方が築いてくださった
経験を基盤としています。

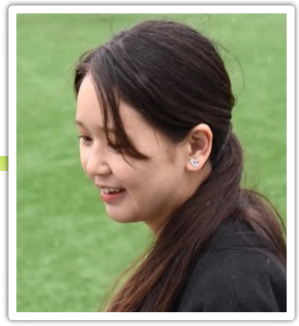
自分は、「祝勝会映像 / 日大文理戦 Pitch-side Cam」
「Inside Training / Pick up Plays」などの動画制作を担当しました。
Twitter・Instagram でのショート動画「Pick up Plays」は、試合の
余韻や臨場感を 60 秒以内で伝えるアクセスしやすいコンテンツに、
一方 YouTube の長編動画は、長尺を活かして親近感やストーリー性を
組み込み、視聴者の感情に訴えかけるように編集します。



１時間５分の「日大文理戦 Pitch side-Cam」は、
《試合数日前の準備から試合終了後の歓喜までの時間経過とそこで生まれるドラマ》、
《試合に賭ける闘志や緊張感》、《ピッチ視点の臨場感とホームの雰囲気》という側面を重視しました。
26 分 30 秒からの得点シーンは、一橋の攻撃スタイルと小平独特の雰囲気が凝縮されているので、
ぜひ見ていただきたいたいです。動画冒頭の近岡監督による戦術ミーティングと実際の試合映像を
照らし合わせると、試合前の叩き込みと選手の体現力が実感できます。
　＊ https://x.gd/e3z5Q

祝勝会映像は《チームスタイルの成長過程の可視化》や
《インパクトある演出により記憶に残す》といった部分に焦点を当てました。アミノバイタルカップの
学習院戦やシーズン序盤の苦難と首位浮上までの成長、グラウンド入口まで埋まった観客席からの
応援など、サポーターの皆様にとって思い出やア式を愛していただけるきっかけになれば嬉しいです。
　＊ https://x.gd/uyw15

ファンから部員になった私にとって、自分が作成した動画を通して
サポーターとチームへの愛情を共有できることは幸せな体験だったと感じています。このような役割を
担わせてくれた皆には感謝しています。ライブ配信については核となるコンテンツであるものの、
機器不良の改善が遅れたことで皆様にご不便をおかけしてしまい、自分の力量不足に後悔が残ります。
新たな担当部員が精力的に改善に取り組んでくれたおかげで、後半戦から復活しました。
複雑で改善余地のある分野ですので、今後も温かい目で見守っていただければと思います。
ご支援、そして動画のご視聴ありがとうございました。



⚽ ア式での経験

清水 真衣 （4年 MGR） 兵庫・白陵高

平素より多大なるご支援、ご声援、本当にありがとうございます。
２月も後半に入った現在、まだ肌寒い天気が続く中で私はこれまでにないほど家に引きこもっています。自分は本来死ぬほどインドア派なのです。そんな体力も気力もなかった私が部活動をしていた４年間で大変だと感じたことを僭越ながら少しだけ語らせていただこうかと思います。

サッカーは屋外競技なので当然といえば当然なのですが、天候に振り回されることが非常に多く、予測できないハプニングが起こることもしばしばありました。中でもつらかったのは練習風景や試合のビデオ撮影、そして試合の配信など、やぐら上での作業です。やぐらの上では夏は地上より太陽が近く、冬は地上よりも風が強かったため、前者では日差しのきつさと暑さにあえぎ、後者では手がかじかんでカメラでボールを追いかけることもままならないという状況に陥りました。

また YouTube 配信では、パソコンをやぐらの上に持ち込んでビデオカメラに有線でつなぎ配信するという形をとっていたのですが、気温が高いとノートパソコンのスペックでは荷が重いことも多く、ハーフタイムにパソコンを充電するため部室に走るなんてことも ざらにありました。スタッフの１人にパソコン用のモバイルバッテリーを持っている人がいたため、このような状況は改善されました。YouTube 配信には他にも様々なトラブルが付きものでした。試合の音声が配信に乗らない、逆に自分の声が入る、そもそも配信が始められていない、などなど何回配信をしても慣れることはありませんでした。

ここまでさんざん大変だったことを書きましたが、
それらのこともいい思い出、経験だったと思います。これからの人生でこれまで書いたような苦労をすることはおそらくないでしょう。また、これらの大変さを分かち合い、トラブルを共に改善しようと奮闘した仲間がいたことは私にとってかけがえのないものです。上記のようなことを経験できたからこそ私はア式に入ってよかったと思いますし、それらのいやなこと、つらいこともすべてひっくるめてア式での思い出と言えるのではないでしょうか。最後になりますが、OBOG、保護者の皆さまのおかげでこの４年間をとても有意義に過ごすことができました。本当にありがとうございました。

⚽ 加藤さんの先輩風

鈴木 元貴 （4年 FW） 東京・国分寺高

書くことが思いつかずにいたが、ふと動画班の時の出来事を思い出したので、
それについて書こうと思う。入部直後、ひとつの部署に所属するよう促され、
自分は動画班のメンバーに加わった。当時の動画班は公式戦のハイライトを作ることだけが仕事であり、
単調でつまらないものであった。4-5分の動画を作るだけなのだが、最初はかなりの時間がかかった。
そもそも動画編集ソフトをインストールできるまで、かなりの時間を要した。

ある日、ハイライト作成の基礎を教わるべく、
夜10時くらいから、1年先輩の加藤紘基さんにズームで手取り足取り教えてもらうことになったが、
肝腎要の編集ソフトがインストールできない。何度試してもできない。原因が全く分からず、
加藤さんと試行錯誤しながら色々な方法でインストールを試みた。パソコンの操作方法もあまり理解して
いない自分に対して、加藤さんは先輩風を吹かせて色々な解決方法を提案してくれたが、全くもって
解決には至らなかった。途中イキって、よく分からないプログラミングのコードを開かせ、
“そこの数字を1から0にしてみて”なんて言ってきたりもした。当然コードをいじったところで
インストールできるわけもなく、解決の糸口が掴めないまま気づけば夜中の3時になっていた。

夜中の3時を過ぎたところで、やっとインストールすることができたのだが、
問題を解決したのは、この私だった。原因はウイルスバスターがソフトのインストールをブロックして
いることにあった。加藤さんは“先輩の俺はパソコンの知識ありまっせ”みたいな感じで色々指示を
出してきたが、解決をしたのは、この私。思えば加藤さんは、あの時なぜプログラミングのコードを
私に開かせ数字をいじらせたのだろうか。そもそも加藤さんは、そのプログラミングのコードが
何を意味しているか理解していたのだろうか。ただ先輩風を吹かせたかっただけのように私は思う。

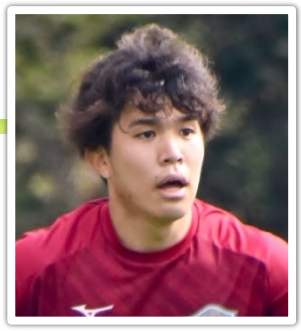
加藤さんの名誉のために言っておくが、
こんなソフトもインストールできない自分に
単位を落としてまでずっと付き合ってくれる、
とても優しい先輩だった。ズームをした日は
レポートの提出期限日だったのに加藤さんは
私の対応に手を焼き書き切ることができず、
落単してしまったのだ。

以上、くだらない内容になって
大変申し訳ないが、自分にとっては大切な
この思い出を酉松会新聞に書き残したかった。

加藤紘基（令5卒）

令和４年度（2022）シーズン　４年生の引退試合

令和６年度シーズンに向けて



⚽ チャレンジャーとして

山﨑 惇樹 （新４年 主将） 東京・芝浦工業大学柏高

平素より多大なるご支援、ご声援をいただき誠にありがとうございます。
本年度は対面で OBOG 総会、祝勝会が開催されたことで、
OBOG の皆様から寄せられる今シーズンに対する期待の大きさを実感し、
身が引き締まる思いでおります。

昨シーズンを振り返ると、自分のサッカー人生の中でも最も充実していたなと感じます。
思えば開幕２連敗とシーズン序盤は思うようにいかず、チームの雰囲気はよくありませんでした。
副将として何もできない自分にふがいなさを感じつつも、ピッチ内外でチームを牽引してくれた
４年生に何とかついていこうと必死でした。そんな中、目の前の１試合１試合に集中することで
勝利を積み重ねながら、チームは波に乗っていくことができました。チームとしても個人としても
着実に成長できていることが実感でき、毎日の練習が楽しく充実していました。
優勝がかかった日大文理との大一番は今でも強く記憶に残っています。

しかし、そんな思い出にいつまでも浸っている時間はなく、
１部リーグという非常にチャレンジングな舞台がすぐにやってきます。
新シーズンに向けてドラマチックなフットボールという目標を掲げ活動していきます。
少し抽象的な目標ですが、具体化すると、次の３つに分けられます。

①コミュニケーションを大事にし常に考え続ける、
②泥臭いプレーを厭わず目の前の勝負にこだわる
③既存の枠組みに収まらない大胆なチャレンジを通して価値を創出する

令和６年度シーズン 東京・神奈川リーグ１部

大 学	昨年度	大 学	昨年度
◆ 東京学芸大学	関東３部 12位	◆ 上智大学	１部 ６位
◆ 朝鮮大学校	１部 １位	◆ 東京大学	１部 ７位
◆ 帝京大学	１部 ２位	◆ 玉川大学	１部 ８位
◆ 大東文化大学	１部 ３位	◆ 武蔵大学	１部 ９位
◆ 成蹊大学	１部 ４位	◆ 一橋大学	２部 １位
◆ 学習院大学	１部 ５位	◆ 日本大学文理学部	２部 ２位

昨年度２部リーグを優勝し１部リーグに昇格したことで、
他チームと比較した時に個人の能力差はより大きくなっています。そんな中で個人の能力ではなく
集団としての総合力で立ち向かっていく、勝利に拘り泥臭く粘り強く戦っていくというような、
これまでの先輩方が築いてきたア式の礎を引き継ぐだけでなく、さらに発展させていくことで
１部リーグでも結果を残していきたいと考えています。

長いシーズンの中で昨シーズンの序盤のように連敗したり、チームとしてうまくいかない
時期があるかもしれません。そうした時に自分がチームの指針となってチームを
引っ張って行けるように、まだまだ未熟ではありますが、成長していきたいと思っております。
先輩たちが残してくれた１部リーグという舞台を後輩たちにも残せるように、
常にチャレンジャーとしての意識を持って結果に一喜一憂することなく、目の前の試合に向かって
最大限の努力を積み重ねていきますので、引き続きご支援、ご声援のほどよろしくお願いいたします。

⚽ ドラマチックなフットボールについて

木室　幸輔　（ヘッドコーチ）

今シーズンよりヘッドコーチとしてチームの指揮を取ることになりました。
簡単にはなりますが、私の経歴と自己紹介をさせていただければと思います。
東大阪市出身の 26 歳で中学生の時にサッカー監督になり、
トップを目指すことを夢に掲げ、大学時代から指導の現場に立ち、今年で 8 年目になります。
指導したチームは地元の高校から始まり、社会人チームから大学を経て、一橋へと至りました。

私はサッカーをやったことがありません。
競技を経験してない者にサッカーを教えられるのかという声は、指導者として活動してから
常々飛んできますし、至極真っ当な疑問だとも思います。しかしライセンスを取得していることは
勿論、サッカー以外の知見から指導に活かすことも出来れば固定概念もあまりありません。
何よりチャレンジングな姿勢を選手たちに示していけることも強みだと考えております。
変わった経歴の若造ですが、一橋ア式の選手たちと共にチャレンジしていくプロセスを
見守っていただければ幸いです。

◆指導歴
：2016 - 2017　大阪府立摂津高校サッカー部
：2017 - 2019　大阪市立東高等学校サッカー部
：2019　　FC 淡路島
：2020～2022　東京外国語大学サッカー部

◆指導者ライセンス
：JFA（日本サッカー協会）４月に B 級ライセンス取得見込み
：FA（イングランドサッカー協会）License Level 1

前所属の東京外国語大学を率いていた際、
ビハインドの状況でも食らいついてひっくり返す試合や
逆にリードしていた状況でも追いつかれてしまうといった
試合など、順当に進む試合が少ないチームでした。
これは勝つべき試合を勝たせられない自分の経験不足も
要因でしたし、私の性格上 2 点取られても 3 点取って
勝てば良いという考えがあるので、このような不安定な
ゲームが多かったのだと思います。

これは、側から見ている分にはドラマチックなフットボールを体現していたと思います。
自分が指揮を取ることにより、この要素をもたらすことは可能なのではないかというのが、
このコンセプトの大元です。

話を一橋ア式に移しますが、昨シーズンは２部リーグで自分たちのスタイルを貫き通し、
観ている人がフットボールを面白いと思えるような内容で勝ち進み、優勝を掴み取ったと思います。
素晴らしい１年でした。しかし１部に上がることでロジックだけでは勝てない相手が数多くいたり、
２部では優位に立てていた所が逆に相手に優位がある、といった試合が続くと予想されます。
また、リーグ戦を何試合も経験した選手も新２～４年生では限られているので、我々としても
まさに新チームといった様相です。誰がどう見てもチャレンジャーとして迎えるシーズンになります。

去年のように終盤に劇的なゴールを決められて敗戦した時のように
絶望することが多々あるでしょう。そのような１年を戦わなければならない我々は今までのような
マインドでは足りない部分も多く、やりたいことが出来ない自分たちに対する向き合い方を見つめ直す
必要があります。しかし相手の方が魅せるプレーが上手ければ、泥臭いプレーで対抗すればいいのです。
ロジカルな相手には自分たちの得意なフィールドなので、真っ向から迎え打つ自信を持てばいいのです。
そのような姿勢が見る者の心を動かすと思います。プロでもない、たかが大学サッカーかもしれません。
それでも目の色を変えて目の前の勝負に挑む姿はとても日常生活では出会えないドラマチックな瞬間だ
と考えます。また、そのような姿勢を貫き通した結果、勝利を掴み取ることが出来ると信じています。

つまりドラマチックなフットボールとは、
《シーソーゲームを制し制されるチーム》《終盤の劇的なゴール》だけを切り取ったものではなく、
そこに至るまでの勝負に対する執念や日々のトレーニングへの向き合い方をひっくるめたものです。
前所属の外大では２点取られても３点取ればいいという私の性格がチームに合っていたこともあるかも
しれませんしれませんが、試合中の諦めない姿勢があったからこそドラマチックな展開を生むことが
出来たと信じています。

一橋ア式はインテリジェンスのある優れたプレイヤーが多いです。
そこに、このようなチャレンジャーにふさわしい姿勢を磨いていくことが出来れば１部でも勝利を
重ねていけると確信しています。そのような姿勢は私が率先して作っていかないといけないのですが、
まだまだ至らない所も多いと痛感させられることが、この２月末時点でも既に多々あります。
私自身も選手たちと共に泥臭く、理想を掲げつつも現実に向き合い、チャレンジし続けていく所存です。
１部というステージに上がり強敵に挑む我々の挑戦を応援していただければ幸いです。

木室

⚽ まちとともに強くなる

宇都宮 彩輝 （新３年 事業本部長） 神奈川・横浜市立南高

2023 年度、ア式蹴球部としては事業面において設立後初となる黒字を
達成することができました。また集客においても 1 試合平均 70 名を記録し、
OBOG、保護者、地域の方々と多くの皆さまにご来場いただきました。
その背後には、酉松会幹事の皆さまからのご助言とご指導、他の部員の多大な協力がありました。
本当にありがとうございました。その中でも特に印象深い事業活動を 2 つほど紹介させて頂きます。

1 つ目は、7 月に行った小平キッズフェスタ です。
第 15 節 ICU 戦に合わせて行われた本イベントでは、地域の小学生を対象に、自由研究相談会、
応援フラッグ作成、応援体験と 3 つのコーナーを設置。約 50 名の子供たちが来場し、部員とともに
自由研究に頭を悩ませ、応援用のオリジナルフラッグを作成し、そのフラッグとともに試合を観戦して
くれました。応援の甲斐もあって、試合は 4 - 0 の快勝。試合後には、出場していた部員から
サインをもらおうと子供たちが長蛇の列を作る大変微笑ましい光景を目にすることができました。

２つ目は、昨年度よりオープンしたファンクラブサービス IKKYO FAMILY です。
保護者の皆様に向けてオープンした本サービスでは、部員の写真やインタビュー、
試合配信、日常の様子の発信などを行い、初年度から多くの方にご入会いただきました。
運営には至らない点も多くございましたが、毎週のコンテンツを楽しみにしていただいている
保護者の皆様のお声は大変温かく、皆様の応援によってクラブが成り立っていることを実感する
大事な機会となっておりました。本年度は OBOG の皆様にとっても魅力的なファンクラブを
作り上げて参りますので、何卒よろしくお願いいたします。

最後になりますが、
我々ア式蹴球部の事業活動はまだまだ未熟で発展の真っ只中です。
本年度からは「クラブとまちがともに強くなる」をビジョンに掲げ、より一層地域に
根付いたクラブを目指していきたいと考えております。OBOG の皆様におかれましても、
競技と事業の相乗効果で発展していくア式蹴球部を見守っていただけますと幸いです。
小平のグラウンドで皆さまにお会いできる日を心待ちにしております。
本年度も何卒よろしくお願いいたします。

⚽ ア式という場所

深田 勇輝 （新２年 DF） 神奈川・横浜翠嵐高

入学してから約１年が経ち、ようやく大学での生活に慣れてきました。
ただ、私にはまだ慣れていないことが１つあります。それは 11 月から始めた
ひとり暮らしです。朝早いア式の活動に間に合うため、自分で早起きし、朝ごはんを食べ、自転車を
漕いで大学に向かい、部活から帰ってきたら洗濯、掃除、夕食作り、そしてバイト。そんな生活を
続けるのは、昔から怠惰である私にとって難しいものでした。実家が横浜にあることから、何かあると
実家に帰り、親に甘えてしまっていました。しかし、２月に入ってからは、“家に帰ってから座る前に
まず掃除・洗濯”と唱えることで、ようやく規則正しい生活を送れています。これからも続けて
いけるよう頑張ります。 さて、テーマを何にしようか悩みましたが、入部して１年経った今、
私にとって「ア式という場所」がどういうものであるのか書こうと思います。

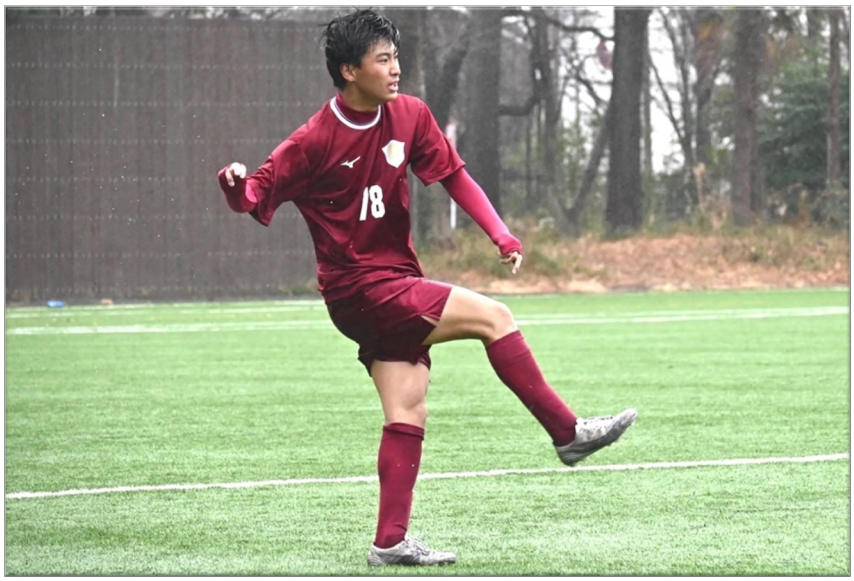
私は決してサッカーが上手なわけではありませんでした。
なので、私が大学で体育会に入ることを中高の友人に伝えると少し驚かれ、“よく続けられるな”と
言われたこともありました。私自身本気でサッカーを続けるのは高校までと決めており、最終的に
ア式に入ったのも他に入りたい団体がなく、大学での友人が欲しかった、というのが決め手でした。
したがって、入部時の私にとっての「ア式という場所」は、サッカーを本気で取り組む、
サッカー仲間がいる場所でした。

入ったからには妥協せずに取り組もうと決めていたので、
そこからほとんど毎日小平に向かい、チームメイトとともに汗を流しました。
しかし、私にとって、ア式がサッカーに本気で取り組む場所であることに変わりはありませんでした。
この場面ではどうしたら良いのか、なんで失点したのか、など上手くいかなったことを自分なりに
考えることもしました。ただ、あくまでフォーカスしていたのは「自分のこと」でした。 しかし、
それが自分の中で少しずつ変わっていきました。チームのために動いている同期を見たからです。

６月頃、B チームのコーチを務めていた２人が対戦チームの分析をしながら
自チームの試合動画を見て、どうやったらもっと強くなれるか考えているのを見て、
私もチームのことをもっと考えなくてはならないのではないかと感じました。また８月に有難いことに
A チームに参加させてもらった際、上手くいっていない私に気づいた先輩方がアドバイスをくれたり、
声をかけてくれたりしてくれました。その後Ｂチームに戻りましたが、そこで初めて B チームでも
先輩方は声をかけてくれていたことを思い返しました。そして同時に、自分は周りが見えておらず、
自分自身にのみ目を向けていたのだと痛感させられました。

ここから私の中でア式というものが大きく変わっていきます。
10 月 1 日にむかえた日本大学文理学部との首位攻防戦のことです。チームは最高の雰囲気で、応援の声量も過去 1 番のものでした。チームが勝利に浸っている中、私は初めて自分が出てないチームの勝利を心の底から喜べていました。それはなぜなのか。理由は明確でした。それは全員がチームのために努力していた姿を見てきたからです。この一戦のためにベンチに入れなかった選手も大きな声を出して応援し、スタッフの方々も SNS での告知や会場の設営などをしている姿を見たからです。私はチームのために戦うことの意味を初めて理解しました。

私はこのア式という場所が大好きです。
部員全員が同じ方向に向かって努力できるからです。今の私にとって「ア式という場所」は、全員がチームのために努力できる、サッカーを本気で取り組める、最高の仲間がいる大好きな場所です。
最後になりますが、一橋ア式蹴球部は今季から東京都・神奈川県 1 部に舞台を移します。昨年以上に厳しい戦いが待っていると思いますが、チーム一丸となって 1 つでも多くの勝利を皆様に届けられるよう精進いたしますので、温かく見守っていただけると幸いです。今季も応援よろしくお願いします。



⚽ メキシコは寛容の国

幸松 栄夫 （昭 61 卒） Tachi-S México

コモエスタ酉松会諸兄、
現役チームは素晴らしい快進撃で悲願の１部復帰、大変おめでとうございます。
毎週のレポートで嬉しく心強く拝見していました。凄いですね。いつの間にやら
還暦を過ぎた私ですが、学生時代には思いもしなかったラテンの殿堂メキシコでの赴任生活、
しかも２回目です。恐らく企業人として最後のご奉公になりそうなこの地での体験を、
皆さまに少しでもお伝えしたいと思います。宜しくお付き合いください。

メキシコと日本との時差は 15 時間、国土は日本の約４倍、
人口はほぼほぼ同じ、首都メキシコシティーの人口は東京の約２倍程度でしょうか。
私が居住するアグアスカリエンテスは、日産自動車の企業城下町で首都から北に車で６時間、
人口 100 万人程度の街です。米国テキサス州との国境は北東へ車で 10 時間強でしょうか。
標高 1,800m の高地に位置し、四季の区別は希薄、どちらかというと雨季か乾季かの２つに大別される
ような気候です。雨季の雨も夕方のスコールが数時間で降りやみ、長くても朝には晴れています。

タチエス メキシコ：自動車座席部品の製造販売

本当に寒い日は数週間で、このレポートを書いている３月初頭では
最低気温 10 度、最高気温 30 度で、年間通して乾燥しており、過ごし易い土地柄です。
皆さんがご心配される治安ですが、幸いアグアスカリエンテスは国内でも有数の治安を維持しており、
お陰様で市内で気をつけて過ごす上では身の危険に会うことは稀です。とは言っても、年末に
置き引き被害に遭ってしまいました。油断は禁物。日本の素晴らしい治安に改めて感謝する次第です。

さて、メキシコ人の気質を独断と偏見で一言で申し上げると、「寛容」でしょうか。
とにかく人にも自分にも寛容で、時間がゆったりと流れていきます。人生を楽しむのが本当に上手で、
待つことを厭いません。あくせく暮らしてきた自分を見つめ直させられます。家族を大切にし、
挨拶が上手で、私たちが失いかけているものを大切にしている感覚もあります。

真にゆったりと流れるメキシコ時間は、慣れないと様々な忍耐が試されるシーンに直面します。
極め付けはパーティー！ 指定の時間に現れるのは日本人だけ。主催者もおらず、準備も出来ておらず、
その後１～２時間かけてゆったりと自分のペースで三々五々集まってきます。待ちきれない日本人は
私を含め、自分でビールとつまみを調達し、勝手に始めるのですが、宴が盛り上がる頃には息切れする
羽目に陥ります。その後タコスの屋台が登場し大きなパーティーでは生バンドも現れて、お待ち兼ねの
ダンスタイムとなります。基本的にはパートナーと２人で踊る形式が主体ですが、ディスコの様に
大勢で踊ることも大好きです。その際にはテキーラの 一気回し飲みも始まり、しばしば日本人は
ターゲットになったりします。随分慣れました・・メキシコで飲むテキーラは本当に美味しいですよ。
お開きも三々五々で、いつの間にやら終わっています。

地元のレストランにてお客さま・会社の若手と共に　テキーラで一気に盛り上がる

メキシコ人は本当にダンスが大好き！パーティーは明け方まで続くこともあります。
結婚披露宴もダンス中心で、こちらも夜中や明け方まで平気で続きます。先日の友人の披露宴では
新郎新婦双方、スニーカー着用でばっちり準備万端でした。皆で一緒に楽しく踊ったり歌ったりできる
愉快で陽気な馴染みの曲が多く、非常に羨しく思います。自分も、もっと上手に踊れたら良いのにと
いつも思います。お酒とカラオケでは簡単には負けませんが・・当然、ダンスパーティーは大音量で
明け方まで続く訳ですが、ここでもメキシコ人の寛容は炸裂し、誰も近所迷惑だと怒らないのです。
先日はホテルの隣がディスコで眠れませんでしたが、こちらもお構いなし。申し訳程度の耳栓が
枕元に置かれていましたが、勿論気休めです。下調べが甘かった自分が悪いと諦めるしかありません。

会社の若手の結婚式：新郎の足元 スニーカーに注目

新郎新婦のダンスで式がスタート

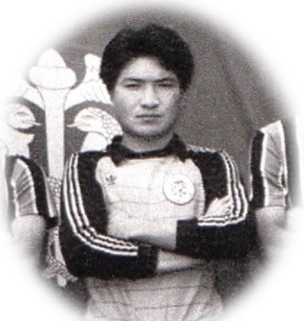
ご賢察の通り、こうした寛容は、時間感覚、約束遵守に厳しい日本人には
特に仕事の面で大きな障壁として立ちはだかります。銀行を含む様々な公共機関でも同様のことが
頻発します。しかし、怒っては何も起こりません！じっと辛抱強く耐え、相手がやる気になるように
工夫することが肝要です。この人を助けてやっても良いかと思わせることができたら何とかなります。
我慢我慢です。お客様は神様なんて、ここでは誰も思っておりません・・ように見えます。

先日、会社の若手が日本各地を旅行で巡ってきました。衝撃の経験だったようです。
全てが綺麗に整って、オーガナイズされていること、特に時間通りに電車が来ることに感動して
帰って来ました。“日本人出向者がよくメキシコで我慢してくれている、感謝せねばならない”と、
お褒めの言葉まで頂戴しました。因みにメキシコシティーの空港ではフライトのゲートがギリギリまで
判明しません。自分で聞き回って探し回らないと乗り遅れます。自分のことは自分で守る。
実に鍛えられます。日本が凄すぎるのでしょうか。当たり前と思っていましたが・・・某 N 自動車の
出向者からは、以下のような日本人の心得も頂戴致しました。５A＝シンコ アーと読みます。
慌てず、焦らず、当てにせず、頭に来ても、諦めず、身に沁みます。諦めず、が肝要です。

それでも慣れると、少しづつ身の処し方を身につけようになります。
日本が素晴らしいと思い込んでいましたが、本当にそうなのだろうか、
自分はもっともっと人生を自由に楽しむべきなのではないか、と常々思わさせられます。
違いを尊重し、お互いの良いところを引き出したいと思わされます。

そう言えば、メキシコ人は人にどのように見られているか、思われているか、よりも
自分がどうありたいか、どうしたいかに、より重きを置いていると痛感します。
他人の目から解放されて、もっと自由です。サッカーも同様に感じます。
自分がやりたいプレーを表現して、自分が楽しく、チームに貢献する。
失敗してチームに迷惑かけるからとプレーが萎縮することは少ないように感じます。羨ましいな。
因みにパーティーでの衣装、振る舞いも同様です。ラテンです♬

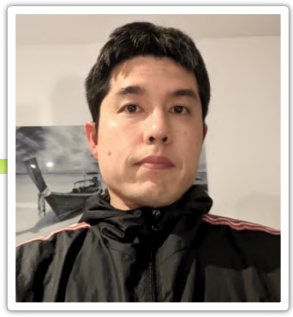
みなさん、すぐにでも来たくなったでしょう。
タコス、テキーラ、コロナビールも最高です。お待ちしております。
それではアディオス、アミーゴ！ アスタ・ルエゴ！



学生時代は GK だった

テキーラ村の樽型ホテルにて
カルロス・サンタナのプライベート貯蔵庫がある
背景に並ぶ植物が竜舌蘭で茎がテキーラの原料となる

メキシコ中西部に位置するミチョアカン州の
州都モレリア市にて民芸品を模した着ぐるみと共に



⚽ オランダ ロッテルダムでの生活

佐々木 伸太郎 （平 13 卒） MarFlex Europe B.V.

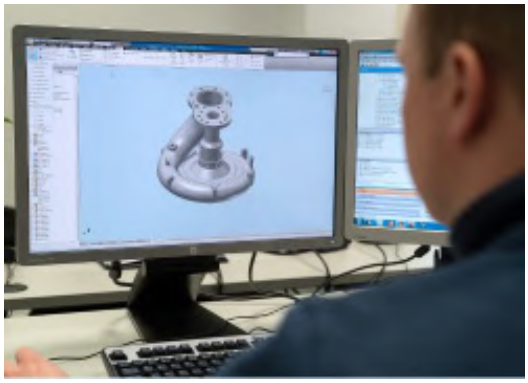
現役部員の皆さま、この度はリーグ優勝、そして昇格、おめでとうございます！
私は現在ロッテルダムに赴任中で大学サッカー部との関わりからは
離れてしまっておりますが、この度、投稿させていただくことになりました。
乱筆にて大変恐縮ですが、以下が皆さまの何かの参考となれば幸いです。

簡単な身上報告

私の現職はオランダ・ロッテルダム、ユーロポート近郊の
舶用系ポンプメーカー、MarFlex Europe B.V. の CFO。
このような書き出しで始めると、何とも優秀そうな
欧州ビジネスマンの響きとなってしまいますが、実際は、
従業員130名ちょっとのオランダ片田舎の船大工が集う
中小企業の経理の元締めなのです。

日本の山口県に親会社である大晃機械工業㈱という
船舶用ポンプメーカーでは名の知れた中堅企業があり、
そちらで財務部門の課長を数年務め、2年前からオランダの
子会社 MarFlex に赴任、ポジションは CFO という訳です。

世界有数の港湾都市 ロッテルダム



MarFlex：船舶用ポンプメーカー

もう少しだけ話を遡らせてもらえれば、元々はみずほ銀行で法人向け事業金融の職務を17年ほど務めて、たまさか山口県内の支店で船舶ファイナンス主体の営業部署の課長職にあった際、家族が気候も温暖な山口県での永住を強く希望。お世話になった銀行に別れを告げ、Almatis B.V.というオランダ企業の日本法人（山口県内に製造拠点）で財務課長職を数年経験。その後、縁あって大晃機械工業に声を掛けていただき、現職に落ち着いた次第です。

現職に活かせる体育会サッカー部のスピリット

従業員数130名前後で日本人は５名、残る社員は皆オランダ人で大半は工場製造メンバーという、いわゆるガテン系の社員が主体の体育会系カンパニーと言った体裁。溶接工に機械工、組立作業担当の筋骨隆々たる身長180㎝超の大男たちが日々、朝から晩まで弊社製品ステンレス製特殊ポンプの製造作業に取り組んでいる姿は圧巻の迫力です。一方の私はというと身長172㎝と日本人成人男性の平均ちょうどの背丈しかなく、チビのアジア人が高身長の白人・黒人中心のメンバー相手に役員として仕事を行う完全なるアウェー環境。そのような完全不利な状況で必要な事とは？ 大学生の内にやっておけば良かった事とは？ オランダの中小企業勤めの私が現役部員の皆様に訓示を垂れるような立場にあるとは到底言い難く、あくまで私の見聞きし感じた事を参考情報として共有したいという想いです。

MarFlex メンバー

体力・フットワーク・根性

正直、海外勤務は体力が要ります。
インターナショナル・クロスボーダー・国際関係ビジネス、そんな華やかな言葉は何処へやら。
体力精神力勝負、スタミナ勝負の日々是戦いの毎日なんです。先ず言語が違えば考え方も違うので、日本人同士で話して伝えるよりも数倍の労力が必要になります。

同僚に全く体育会経験のない、私大の国際関係サークル出身の海外畑の駐在員がおりますが、
毎日、オランダ人たちとのディスカッションでスタミナ負けして、業務が停滞・・
そんな時に一番役に立つのが、小平グラウンドで培った体力にフットワーク、そして、
苦しい試合展開でも最後の試合終了の笛が鳴るまで諦めない根性です。

現役時代、サッカーの技術レベルは別として、汗と泥にまみれて必死にボールを追った経験が、
足が攣りそうな最悪なコンディションでも耐え続ける根性が、アフターの飲み会で先輩方から何か面白い
話題出せよ等々いじられて当意即妙？のネタを繰り出す、その全てが今に活かされていると言えます。
190 cm の相手だって座って面と向かえば、座高では引けを取りません！相手の目をしっかりと見つめ、
その場の流れに合った小ネタを繰り出しつつ最後は論破して指示に従わせるのです。(所要時間 1 時間超)

チームワーク・仲間への思いやり

無論、現地メンバーと議論を撃ち合い、指示を出して、
更には共通理解を深めていくには英語はどうしても必須になります。現地メンバーに日本語を教えて
みたりもしますが、なかなか覚えてくれませんで、“むしろオランダ語を覚えてくれたら嬉しいんだけど”
などと言われる始末・・しかしここで伝えたいのは、語学以外の、相手の気持ちを汲み取るといった、
日本人ならではの気配りとか、思いやり、仲間を大事にする意識といった内面的な部分の話。
オランダ人の気質はゲルマン系の民族なのに意外かもしれませんが、極めて陽気な、言わば
ラテン系のキャラクターで、毎日面白おかしくネタを振り合って、楽しく笑って暮らしている印象。
結果、場を盛り上げられるような話題を振ったり、それでいて周りへの気配りも出来るような人間は
確実に人気を得たり信頼されやすいので、やっぱり適性抜群なのは体育会系出身者！
現在オランダ語を猛勉強中、然しながら40の手習いと申しまして、余談ですが、
第２外国語のフランス語を落第寸前で突破した苦い思い出そのままに、なかなか上達しませんね … 。

オランダ・サッカー事情

最後にオランダのサッカー情報です。オランダ人のサッカー熱は凄い！
国内リーグ Eredivisie は 18 チームの構成で、３大クラブ Ajax・PSV・Feyenoord が人気。
私の職場の朝は週末のサッカーの結果についての話題で始まります。オランダリーグ、若しくは Champions League、Europe Conference League の何れかについての話題で、30 分くらいは軽く持っていかれる。そんな中、我が財務経理メンバーの事情は、やや複雑です。

向かいに座っているオバちゃん Petra Bioch Marion は
Rotterdam を本拠地とする Feyenord の大ファン。彼女の週初めの仕事パフォーマンスは
Feye の結果に大きく左右されますが、会社の資金収支予測が Feye に左右されるわけにもいかず、
試合結果のフォローは上司である私の重要任務です。

かたや窓際に鎮座する課長の Jan Roos は根っからの Ajax ファン。
当然にして、こいつの機嫌も Ajax 次第。経理業務全般は週末 Ajax が握り
特に彼はサッカー経験者。試合結果のフォローも簡単ではないため、
サッカー部時代の経験をフル活用。ちなみに今シーズンの Ajax は絶不調。
この週末は順位決定戦なのに、ホームの Johan Cruijff Arena で
ボコボコに負けてしまい、正直フォローのしようもなく、
明日は Jan の顔を見たくないのが本音。片や Feyenord は快勝。
１人は大喜びの超ハイテンション、１人は絶不調大敗の不機嫌モード、
面倒くさい展開が想定されます。

ところでFeyenordサポーターは、
その暴れっぷりがオランダ最凶とまで言われるほど評判が悪く、ローマではAS Romaに大敗した
腹いせに現地の噴水を破壊して多数が出禁。国内リーグ優勝の昨シーズンもRooterdam市内で
大暴れして、路面電車の複数路線が通行不能となるし、中心部の噴水に飛び込みまくりの、
爆竹を打ち鳴らしまくりの盛大な宴を派手に繰り広げました。

試合前の発火

Fyenoordの優勝で市街に集結する熱狂サポーター

バス停の上に登って騒ぐサポーター

市内交通マヒの縮図

オランダのサッカーは弱い？

サポーターは最凶だが、欧州全体におけるオランダサッカーの強さは
大変残念ながらそうでもありません。Champions League など Spain や England、Italy のチームに
当たった時点で、会社の部下たちは即、諦めモード。“ああ、もう終わった”と天を仰ぐ。
Aston Villaと当たるのですが、“別に Liverpool や Chelsea と対戦するわけでもないのだから、
まだ嘆かなくてもいいだろうに？”と慰めても、“いや、もう無理無理”と取り合わない。それでも
サポーターたちは各国のスタジアムで花火を盛大に燃やし、相手チームを威嚇し続けるのです。

オランダで活躍する日本人選手

ドイツ・ブンデスリーガには及ばずも、Eredivisie にも日本人選手は複数在籍しています。

◆ FW 上田綺世（25） Feyenoord
前身ベルギーリーグでは 22 ゴールを記録。期待されるも、メキシコ代表の FW と
ポジションを争う事になってしまい、出場機会に恵まれず、不運な状況。

◆ MF 斉藤光毅（22）/ MF 三戸舜介（21） Sparta Rotterdam
この２人はスピード溢れるドリブルと高い技術でサイドを突破、スタメンを確保している。

上田綺世

齊藤光毅

三戸舜介

◆ SB 菅原由勢（26） AZ Alkmaar

2020 シーズンから AZ Alkmaar に所属。オランダリーグに在籍する選手では一番の古株。高い技術を持つ SB として複数シーズンに渡ってレギュラーポジションを確立している。守備の安定感から攻撃参加、鋭いシュートで得点を獲得するオールラウンダーである。

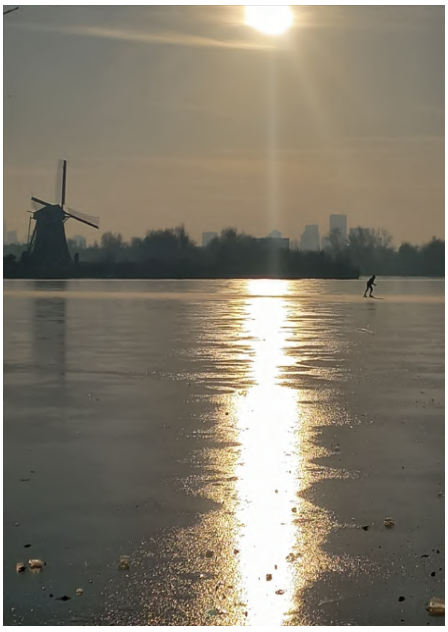
◆ FW 小川航基（26） NEC Nijmegen

あまり知られていないかもしれないが、私は小川選手を最も応援している。上田選手のような知名度も斉藤選手のようなドリブルテクも少ないかもしれないが、小川選手は凄まじく足が速い。そして運動量を厭わずチームのために走り続ける。ひたすらのハードワークの末、チームの信頼を勝ち取り、今シーズン 7 ゴール。上田選手は最後にしか登場しないが、小川選手は倒されても倒されても走り続け、監督も彼を起用し続け、試合終了後には彼をハグする。リーグで最もチームの信頼を得ているのは小川選手だ。

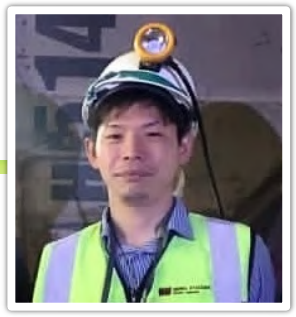
オランダに来て、ただひたすら会社のメンバーのために自分が出来る限りの力を尽くして働き、サッカーでは社員が勝手に申し込んだフットサル大会に参加したり、Eredivisie で戦う日本人選手を応援します。共通して学べた事は、仕事もサッカーもチームワーク！仲間の為に自分が何が出来るか？ どこまで頑張れるか？ この繰り返しなのかと。

社員宅近所のチューリップ畑

近所の風車



Amsterdam 早朝の運河



⚽ 日本から 30 時間の国 南米チリ

竹本 圭佑 （平 28 卒） MITSUI & CO. (CHILE) LTDA.

皆さま、「チリ」と聞いてどのような印象をお持ちでしょうか。
サーモン、ワイン、銅、南北に細長い国、アンデス山脈、アタカマの星空、
モアイのあるイースター島、アウトドアブランドの企業名・ロゴになっているパタゴニア
（米国企業ですが）、2015 年と 2016 年にアレクシス・サンチェスとアルトゥーロ・ビダルを擁し
連覇を果たしたコパ・アメリカ等々。もしくは、特に何の印象も持っていないが遠そう。。。
物理的距離があり、“チリといえば、これっ！”といった強烈なインパクトを持っているものがないため
日本人にとってあまり馴染みがなく、先進国ではないが発展途上国でもないようなといった
曖昧な印象を持たれている方が多いのかなと思います。

私は 2022 年 8 月にチリに到着し、約 1 年と半年が経過しました。
赴任前に一度出張で来たことがあり多少のイメージはついていましたが、やはり生活するとなると
新たな発見や新鮮なことが多くあります。そこで、今回は皆様に少しでもチリを身近なものに感じて
もらうべく、チリの概要、仕事･生活環境、余暇の過ごし方について紹介させて頂きます。

チリ概要

チリは南北に長い国で、東西は太平洋とアンデス山脈に挟まれ数 100 km しかないものの、
南北は 4,300km に及びます。故に、北側は砂漠気候、首都サンチャゴがある地域は地中海性気候、
南端に至っては寒帯となるほどひとつの国の中で多くの異なる気候になっています。
他の南米諸国は政治･経済問題を多く抱える中、チリは比較的安定していて南米の優等生と言われており、
ラテンのイメージのようなオープンで情熱的といった国民性ではなく、どちらかといえば大人しく
落ち着いています（それでもパーティー好きですが ）。

サンチャゴ市街

又、チリは昔から資源によって国が成長してきたという歴史があります。
過去は火薬や肥料の原料となっていた硝石、現在は銅が国の収益･発展を支えてきました。又、今後は銅に加えてリチウムが重要になると言われています。過去、資源を巡って隣国ペルーやボリビアと戦争による領地の奪い合いをしたこともあり、資源は南米諸国にとって非常に重要な財産と認識されています。一方、資源への偏重を軽減すべく地中海性気候を活かしたワイン造り、良質なフィヨルドでのサーモンの養殖により産業やイメージを造りあげてきており、今後は異なる気候を活かした再生可能エネルギー（太陽光や風力）や水素といったクリーン&グリーンな国を目指しています。

仕事・生活環境

私は金属資源関連の部署に所属しており、チリ国内における新規事業開発、
出資銅鉱山の生産物の取扱い（トレーディング･マーケティング）をメインで行っています。チリに来る前に日本でも同様の仕事をしていた為、業務内容に大きな変化はないものの、資源産出国にいるからこそ感じられるダイナミズムや国における資源の重要性を肌で感じ、とてもワクワクさせられる環境にいます。鉱山や工場に実際に足を運び、顔を見ながら膝を突き合わせながら互いにとって win-win なビジネスを創っていくことは、日本では得ることの出来ない貴重な経験となっています。

仕事に関してはチリ人（というか南米全体）のペースが存在し、スピードがとても遅いです。
ひとつのメールの返信に１週間かかることは普通だし、むしろ早いくらいで、日本人の感覚からすると
もどかしさを感じずにはいられません。日本の本社からは何故返信がないのか、議論が進まないのかと、
せっつかれることが頻繁にあります。また仲間意識や内輪意識が強く、コミュニティの外の人に対しては
あまり多くを語りません。でも一度入り込めば、公私に亘る様々な話をしてくれます。
“私は貴方の会社と会話しているのではなく貴方と話しているのだよ、Amigo（スペイン語で友達）”
と言って一個人にリスペクトを持って接してくれます。逆に言うと個人的な印象や繋がりによるところが
大きいので、仕事が属人的になっていることも散見されます。ある企業の方が会社を去り、後任の方と
話をしていると今までの経緯を把握しておらず、一からやり直しとなることが往々にしてあります。
私はせっかちなのでスピードが遅いことには非常にフラストレーションが溜まりますが、
機械的ではなく人間味のあるチリの文化や慣習が気に入っています。

さて、次は生活環境に関してですが、首都サンチャゴはかなり発展しており、
生活に不自由することはあまりありません。ビジネス街にはガラス張りのビルが立ち並びレストランも
たくさんあります。また子どもにとても優しい国で赤の他人にも微笑んでくれたり助けてくれたりします。
子供の遊び場である公園も至る所にあり、子育てをするにはとても良い環境です。では、極めて安全かと
いうとそうではなく、最近は不法移民の増加を背景に麻薬や銃事件の数が増加しており、都心部では
スリがいるので完全に気を緩めて食事をすることは出来ません。いらっしゃる際には是非ご注意下さい。

サンチャゴ市内のビジネス街にある
肉料理店 La Cabrera にて職場の同僚と

食事については、チリには代表的な料理がなく、チリ人は料理が下手というのが一般的な評価です。
赤みの牛肉や海鮮は充実しており素材は良いのだけれども、料理するとあまりおいしくないということは多々あります。どうしてそうなったのか考えても理解できず、良い選手が揃っているのに勝てない監督はこういうことなのかと感じるときもあります。実際にお肉のレストランはブラジルやアルゼンチンから、海鮮系はペルーから多くのレストランがチリに展開されています。サーモン、雲丹、いくら、岩ガキ、アワビ（のようなもの）といった海鮮は日本よりもかなり安価で食べることが出来ます。
しかし全体的な物価は高く、この点は来る前に抱いていた印象と真逆で未だに困惑してます。

余暇の過ごし方

最後に余暇の過ごし方を紹介させて頂きます。
ワインが有名なチリではサンチャゴから１-２時間で多くのワイナリーに行けるので、休日に友人や同僚とワイナリーツアーに行き、数種類のワインをテイスティングした後、食事を楽しみます。
ワイナリーはとてもお洒落、且つ整備されているので落ち着・いた時間を過ごすことが出来ます。
又、アサードと呼ばれる BBQ もしばしば行います。多くのマンションの屋上にはアサード場があり、休日は誰かしらがそこを利用しています。

私は日本人サッカーチームに所属し（チリ人が４-５人在籍）、
月に数回、体を動かしております。背番号は学生時代と同じ７番。チリではサッカーが圧倒的に人気のスポーツで、サッカー好きが多く、チリ人のチームには初心者も多く在籍しています。この点は日本と大きく異なりますが、サッカー好きが社会人になっても気軽にサッカーができる環境があるのは、とても羨ましいし感心させられます。流暢なコミュニケーションは取れないけれどボール１個で意思疎通が出来、互いに充実した時間を過ごすことが出来ているので、サッカーってやっぱり凄いな、これがサッカーの魅力のひとつだな、と日本から遠く離れたチリで感じております。

平28卒 メンバー

⚽ 大連での駐在生活

普勝 悠暉 （平 29 卒） 伊藤忠丸紅鉄鋼

2023 年の 5 月より、中国遼寧省の大連という場所に赴任しております。
「坂の上の雲」の舞台、203 高地のある場所が一番皆さんしっくりくると思います。

大連はどんなところか

中国の中では東北地域にあり、北京よりも北朝鮮が近いという場所です。
仙台と同じ緯度ですが青森並みに寒いです。冬は–15 度に達し、海街なので風が強く体感温度は–25 度前後となります。湿度が低く雪はあまり降りません。夏は軽井沢のように避暑地であり、ジメジメしておらず過ごしやすいです。観光は 7-8 月をお勧めします。PM 2.5 の影響も感じたことはありません。冬は寒いですが、屋内は暖気という集中暖房があり暖かいです。また治安についてですが、日本より良いかもしれません。高鉄（中国の新幹線）に乗る際にも荷物検査があり、身分証が必要。各地に監視カメラがあり、支払いのほとんどがスマホの QR コード決済なため現金を持ち歩かないので、スリも強盗もほぼ起こりません。唯一あるとすれば運転マナーが悪く自動車事故は多発しています。日本企業が数多くあることもあって日本語を話せる中国人も多く、日本人はとても住みやすいと思います。

アクセスですが、日本からは主要都市の各地域から直行便が出ており、
羽田・成田からは約 3 時間。時差は 1 時間日本より早いです。大連に居住する日本人は 3,000 人程度。10 年前に比べて半減していますが、世界の中では 50 位。昔は日本企業の進出場所としての有力候補地でしたが近年では広州・深圳に抜かれてしまいました。コロナの影響で中国全体でも日本人の居住人数が毎年 2-3 千人減っております。（私が卒業した 2017 年は 10 万人 2022 年の人数は 8.3 万人）。現在中国に旅行するには、VISA が必要ですが、ご飯は非常においしく（主食は麺、米、餃子）、非常に綺麗な景色の場所が多く、日本料理店も多いので一度旅行に来てみてください。

大連市街

大連で何をしているのか

私は現在、大連藤洋鋼材加工有限公司という薄板の材料を加工するコイルセンターで勤務しています。電磁鋼鈑という材料を主として加工しており主な用途はモーターと変圧器です。近年世界をにぎわせている EV（電気自動車）のメイン動力として使用される材料になります。日本製鉄や JFE スチール、中国の鉄鋼メーカーの宝鋼や首都鋼が相次いで、この材料の製造量を増やすために億単位の投資をしています。中国はガソリン燃料の自動車の技術では、なかなか日本・欧米諸国に追いつけないため、EV を一大プロジェクトとして国を挙げて支援しています。例を挙げると現在上海や広州といった都心部ではガソリン車を新たに購入する場合のナンバープレートは 200 万円。取得まで 2 年待ち。EV を買えば、すぐに手に入る上に補助金も付きますよといった状況です。変圧器は海外に住んでいれば使われている方もいますが、日本で暮らされている方は馴染みがないかもしれません。電力発電所で作られた電圧を家庭で使えるように変圧するための装置です。街の電柱の上にある箱です。名前の通り電気を使用する場所には漏れなく使用されていますので、EV が発展する、オール電化生活となるにつれて必要量が増えてきます。今、私はこのような EV 案件やトランス需要を追っかけています。世界の最先端に触れるインフラ産業に関われる面白い仕事です。

大連での生活

大連の物価は日本と比べて、とても安いと思います。下記一例です。

移動　居住区＝市内までの距離　直線距離で 20 km ほど

＊タクシー：所要時間 30 分 / 料金 1000 円程度（初乗り 200 円）
料金は運転手と予め決めることが多い

＊大連バス：所要時間 40 分 / 料金 40 円
バスは日本と違い、結構爆走するので怖いです。

＊ 電 車　：所要時間 40 分 / 料金 100 円

食事 （一般的なローカル食堂）

肉まん 8 個 350 円 / 担々麺 1 杯 400 円 / 餃子 1 皿 300 円

肉まん

担々麺

餃子

日本料理は日本と同じくらい。マグロやカニ、和牛は日本の 2 倍くらいします。
スタバやマックは日本よりも少し高価。

日本料理

海鮮

串焼き

火鍋

羊の丸焼き

中国名物 白酒

生活

中国のアルバイトの時給は 300～500 円。平均給料は月 10～15 万円です。
上海・北京・広州の物価は、もう少し高いと聞きます。ゴルフは習近平が嫌いだからなのか場所が少なく、ものすごく高いです。大連でも 1 プレイ 20,000 円を超え、キャディ込で 25,000 円ほどになります。
娯楽はビリヤード、カラオケはありますが、日本の歌は日系客を相手にしたスナックへ行かないとなかなか歌えないです。

おじさま方の生活は、週末ゴルフを行い、その後日本人街居酒屋で飲み、
その後スナックに繰り出すという黄金ルートを駐在中繰り返すそうです。私みたいな健全な若者は、午前中は授業 or 買い物、午後は駐在員同士のコミュニティ内でサッカー、バドミントン、登山など趣味を楽しむことが多いです。

中国のユニークなところ

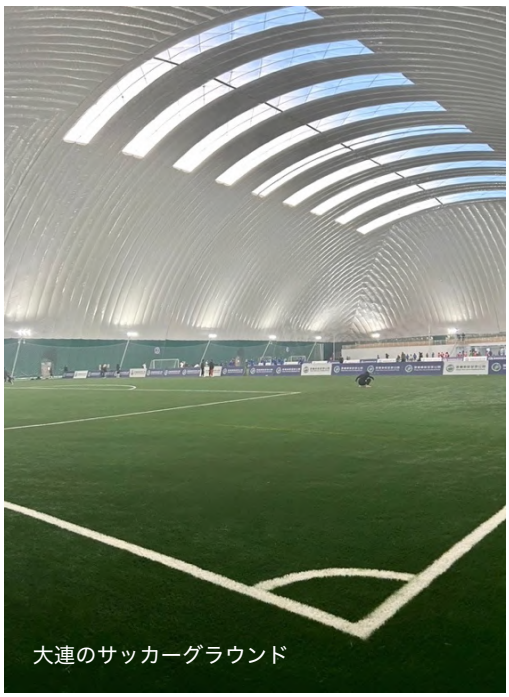
中国の休暇の特徴は「少ない・大型連休・毎年変わる」です。
大型連休は 2 つ。国慶節と春節です。こちらは大抵 7-9 日くらいの休暇になるため、平日が 5 日ほど休暇になります。労働節や清明節、端午節などもありますが、前後に振り替え出勤日が設定されるため、上記の 2 大休暇以外はあまり連休感を感じません。中国人は残業を殆どしませんが、出勤日が多いので日本と同じくらい働いている感覚です。

大連のサッカー事情

大連の人はサッカーが非常に好きです。中国ではバスケ、卓球が人気ですが、
大連市は至る所にサッカー場があり、未経験者、経験者、若い人からご高齢の方まで幅広くサッカーしています。会場費用もハーフコートで 2 時間 7,000-8,000 円ほど、高くて 1 万円。
7-8 人のソサイチをやることが多いです。空調整ったフルコートでも高くて 2 時間 2 万円程度なので対戦チームと割り勘にすると、1 回 1 人当たり 500～600 円程度でサッカーを楽しめます。

中国人は足元の技術は高くないですが、フィジカルが強く推進力があります。
メンタルは日本人の５倍くらい強いです。遠くからバシバシシュート打ちますし、何度失敗しても
へこたれないし、そのプレイに対して誰も怒りません。日本のエンジョイサッカーは、きれいにつないで
決める傾向にありますが、中国のエンジョイサッカーは、ロングフィードからのポストプレイをそのまま
シュートのパターンが多く、泥臭いプレイもまた多いので実戦に近く私は好感が持てます。プロサッカー
事情で言うと、昨年大連市の唯一のプロチームであった大連人が中国２部リーグに降格したことから
スポンサーが降り、チームが解散しました。仕事していても思いますが、このような決断の速さは中国
文化をとても感じます。今年は大連市も 10 億円をサッカープロジェクトに投資する方針とのことなので
大連サッカーがどのように変わるのか楽しみにしています。

中国華北 CUP（大連・北京・青島・天津の日本人チーム 総当たり戦）


大連のサッカーグラウンド

年末忘年会で年間得点王受賞

⚽ 62 番と 63 番の絆 ～国を越えて～

相原 昌典 （4年 MF） 東京・麻布高

自分が大学４年間で一番長い時間を共にした選手との、
少し特別な関係性について述べていきます。彼の名は米 凜太朗で背番号は 63。
自分は 62 番だったので、入部当初から少し縁を感じていました。
仲良くなった背景は共にいじられキャラであったから、これに尽きます。北河や工藤から常にいじられ、
ア式のおもちゃとしてぞんざいに扱われてきたので、私たちは次第に距離も近くなり、自分も彼を
同じキャラのライバル的な存在として認識するようになりました。

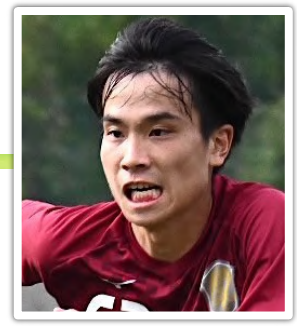
大学２年生の頃、彼は留学を以前から硬く決意しており、
“３年の夏からは留学に行くために休部をする”と話すように
なりました。そんな話を聞いて、自分も留学を目指したいと
思うようになりました。大学入学直後からざっくりと考えては
いたものの部活への思いも捨てきれず、ア式に入部して以降は、
留学を諦める理由を探すようになっていました。そんな時期に
彼から留学への硬い決心を聞いた時は正直びっくりしたし、
悔しさもありました。身近な存在であった彼が自分の意志を
持ち、大きな決断を下そうとしていることに刺激を受け、
“自分も彼についていこう”、そう決意しました。

それからは、毎日一緒にいるようになりました。練習では B チームを一緒に引っ張って行こうと
お互いを鼓舞して切磋琢磨し、練習後には留学に向けた勉強や準備を進めていきました。
そして３年の春には２人の協働が実を結び、お互い A チームに昇格、公式戦初出場を果たしました。

2022 年４月 東大とのトレーニングマッチ

さらに、本当に偶然が重なり留学先が２人とも「カリフォルニア大学アーバイン校」に決まったのです。
しまいには、留学先での寮まで一緒になってしまいました。こうして留学先でも毎日一緒に過ごし、
留学先で創立したチームでは２人で無双して大会優勝にも導きました。私生活でも奇遇な事に、
お互い人生初の彼女が現地の学生なんてことも起きました。

こうやって振り返ると、本当につくづく同じ大学生活を歩んできたなと感じます。
「類は友を呼ぶ」この言葉がこんなにも適切に当てはまることもないのではないでしょうか。
背番号が１つ違いという関係から大学生活をとにかく共にする関係へと発展し、
お互いの目標まで達成してしまう、そんな２人の絆が生んだ奇跡の物語でした。(終)
最後になりますが、これまで大変お世話になりました。自分は３年強の在籍ではありましたが、
ここまで実りある生活を送ることが出来たのは OBOG の方々のおかげです。
これからは自分も現役生を支援する側として貢献し参りますので引き続きお願いします。



⚽ 終わりの始まり

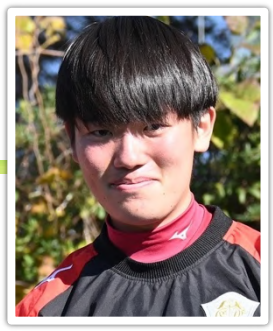
米 凛太郎（4年 MF） 県立千葉高

ア式での４年間の思い出はたくさんあるが、絶対に欠かせないものがある。
ジャンケンである。みんなでご飯に行くたびに会計はジャンケンで決めていた。
そして、私はそれが絶望的に弱かった。今でも忘れない。１年生の秋、東戸塚での練習試合を終え、
同期 10 人以上としゃぶしゃぶを食べに行った。どういう流れかは覚えてないが、会計をジャンケンで
決めることになった。何人かは参加しなかったが、私は意気揚々と参加した。勝つ気しかしなかった。
無料で 3000 円のしゃぶしゃぶが食べられることなど、なかなかない。７人がジャンケンに参加した。
支払うのは１人だけだ。こんなの負けるわけがない、と思っていた。しかし、決着はあっさりついた。
私が負けて７人分のしゃぶしゃぶ約 20,000 円の会計を支払った。そして、この日から悪夢が始まった。

その翌日に同期５人で鬼滅の刃の映画を見に行ったのだが、そのジャンケンでも負け、
私は「鬼滅の刃を５回分見た人」として、その後数ヶ月に渡って名を馳せることになった。さらに
その後も、サ式で遊びに行く時には会計ジャンケンがつきまとい、私は４年間のア式生活で約 30 万円の
負けを計上した。汗水垂らして働いたバイト代が一瞬のうちに消えていくのは悲しかったが、それでも
たまに訪れる勝利の瞬間とタダ飯のために戦い続けたア式生活は悪くなかったと言える。タイトルでは
終わりの始まりなんて書いたが、正直ジャンケンを始めたのが終わりだなんて思っていない。ア式は
卒業するが、同期で集まった際にジャンケンは、これからも引き続き行われると信じている。

１年時によく通っていた国立の「五右衛門パスタ」にて

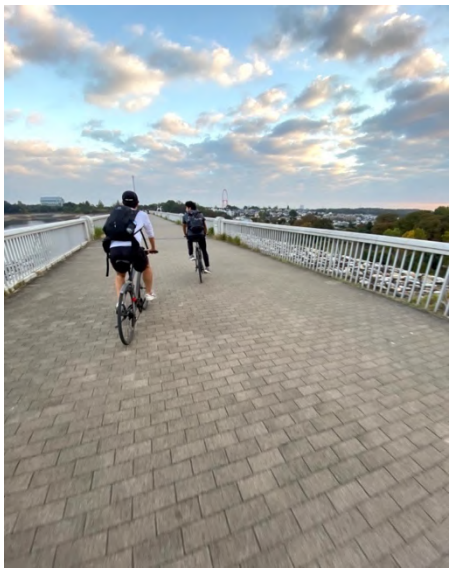
卒業旅行で行った石垣島にて



⚽ FC サイクリング

駒形 拓海 （4年 MF） 県立千葉高

チャリが好きな同期の２人とチャリで旅をしようと考えていた。
１回目の目的地は、江ノ島。町田あたりの坂がきつくてめちゃくちゃ大変だった。
２回目の目的地は、伊香保。前橋までは平坦な道のりで余裕だったけど、そこからは本当に大変だった。
永遠に坂道が続いて、立ち漕ぎでも進めない坂道だった。ア式人生で１番きつかった。
でも、登り切った後の達成感は格別で、そこで食べたご飯は過去一美味しかったかもしれない。
１時間漕いだら毎回休憩のためにコンビニに行ってダベったが、それもまたよかった。
こんなにバカなことができるのはア式だけだと思う。いい経験だった。



⚽ コロナ禍の「等々力」時代

北河 耕太 （4年 DF） 神奈川・浅野高

今、私は同期６人とヨーロッパ旅行をしていて、スペインのバルセロナにいる。
これまでの１番の思い出は、やはりサッカー観戦だ。自分がチームの一員で
あるかのように声を張り上げるサポーター、その声に惑わされず冷静に高次元なプレイをする選手たち。
そして、そのピッチで活躍する三笘選手や同い年の久保選手。その姿は本当にかっこよく興奮した。
大学生活中、もっと海外で試合を見たかったなと思ったり思わなかったり。

トッテナム vs ブライトン：ロンドン

ウエストハム vs アーセナル：ロンドン

PSG vs R ソシエダ：パリ

パリサンジェルマン対レアル・ソシエダを見終わり、パリのホテルに戻ると渡邉がコロナにかかる。
そして同じ部屋にいた私も 38.9℃、おそらくコロナを発症、皆が観光している中、ホテルで待機。
暇になり、やっと記事の内容を考え始めた。過去を振り返った時、コロナ禍の真っ只中、
１年生の冬オフ明けのラントレ時期、通称「等々力」時代が真っ先に思い出された。
この時代の思い出について書いてみる。

１年時の１～２月？頃、ア式は学校からの許可の問題で自主トレという形でラントレをしていた。
移動を控えるため地域ごとに各学年のメンバーが振り分けられ、私、相原、六角、福永（２年で退部）は
川崎の等々力第１サッカー場でトレーニングをする「等々力組」だった。

川崎市中原区 等々力第１サッカー場

ラントレは確か月火木金で行われ、週３でオフ。
２時間ひたすら色々な無酸素・有酸素運動のラントレを繰り返し、ボールを扱うことはほとんどなく、
ただただきつかった。我々１年組はラントレのやり方が未熟で情けないと先輩によく怒られ、
オフ時に地元の浅野高校で同期たちとサッカーをして怪我をし、シーズン中なのに自己管理が足りないと
戸田監督に長文ラインで怒られたりもした。今でもその情景を鮮明に思い出せる。

だけど２時間の練習を耐えれば、あとは自由で、とにかく楽しかった。
みんなでカレーを食べたり、練習後グラウンドで１～２時間イントロクイズをしたり、
「花束みたいな恋をした」を見て３人でエモくなったり、ある YouTuber が３人の中で大流行したり、
ノリで川崎に任天堂 Switch を買いに行って相原の家でマリオカートをしたり、
オフの日は昼まで寝て、起きたらまたマリカーしていた日々。２日オフは天国だった。
みんなで“ラントレはオフを楽しむためのスパイス”とか言って、
辛い「等々力」時代を何だかんだ楽しんでた。

側から見ると“なんだ、その大したことない日々は”と思われるかもしれない。
しかし肉体的疲労はあったが精神的には一番楽しい期間で、
ストレスは少なく、ある意味充実した日々だったような気がする。
コロナがなければ「等々力組」は生まれなかったし、コロナで唯一良かった点だなと、今では思う。

シベーレス宮殿　マドリード

北河耕太・野口泰斗・小林尚久・近岡 頌・六角勇人・渡邉直樹

⚽ 自分探し in ロンドン

木下 涼太 （4年 DF） 神奈川・浅野高

卒業旅行と題して、２月中頃から３月初旬まで
ヨーロッパ旅行に行ってきました。ロンドンから始まり、パリ、ブリュッセル、
ケルンの４都市を、Ｂチームで仲良くしていた 向井友紀、清水一貴、山下 諒と周遊してきました。
特に印象的だったロンドンにフォーカスして書こうと思います。

もとより３泊する予定だったのですが、私は直前にコロナに感染し、
出発を１日遅らせたため、２泊となってしまいました。初日はいわゆる観光名所、バッキンガム宮殿から
始まりビッグベン、ウェストミンスターなどなどを見て回りました。すべての建物が日本にはないような
細部まで凝った作りになっていて、毎度“すげぇなぁ”とか激薄感想を述べながら回っていました。
偶然、宿泊していた場所から入社先のロンドンオフィスが近かったので行き、金融街として知られる
ロンバードストリートをゆっくり回りました。金融街を歩くとイケイケなビジネスマンを何人も見るし
そのたびに自分も春から頑張ろうというモチベーションに大きくつながりました。
これだけでもヨーロッパに行ってよかったなと思えるほどでした。

ビッグベン

ウェストミンスター寺院

ロンバードストリート

初日でイギリスの観光名所を回り切った感があったので、２日目はぶらぶら街歩きをして、
夜は向井が必死になってチケットを取ってくれたアーセナル vs ニューカッスル戦を
エミレーツスタジアムで観戦することになりました。アーセナル 10 番のスミスロウのユニを買い、
初めてのプレミアライブ観戦。選手のクオリティはもちろん、応援、スタジアムの熱気、サポーターが
（良くも悪くも）真剣になる姿は日本のものとは大違いでした。スタジアムにいる全員で応援歌を歌い、
スタンドから罵声を飛ばし中指を立て、点が入ると隣同士で抱き合って喜びを分かち合う、これこそ
本当にチームとサポーターが一丸となって戦っているということだなと感じるとともに、引退して
数か月たち忘れかけていたア式の熱量も思い出し、自分はやっぱりサッカーが好きだなと思いました。

向井友紀　山下　諒　清水一貴　木下涼太

ア式に入部する前の生活

山下　諒　（4年 FW）　鹿児島・鶴丸高

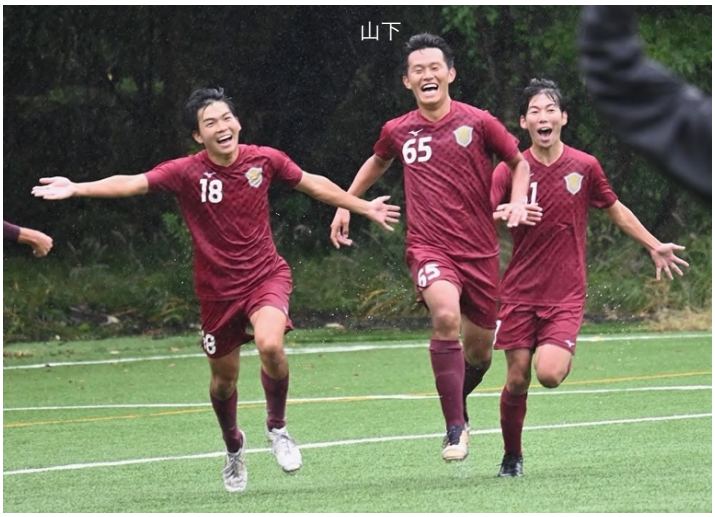
私がア式蹴球部に入部したのは大学２年生からで、大学１年生の時には
サッカーサークルに所属していた。ア式に入部してからは常にやることがあって、
充実した毎日を過ごすことができるようになったが、大学１年生の頃はコロナウイルスが
流行していたこともあり、私の人生の中で最も非生産的な１年となった。あえて振り返ってみる。

2020 年４月、１年間の浪人期間を経て、
ようやく一橋大学に入学できることとなった私は上京して一人暮らしを始めた。しかし、すぐに授業の
全面オンライン化が発表され、世間は外出もままならない状況になってしまったため、４月４日には
当時実家があった鹿児島に帰ることになった。地元に帰ったのはいいもののコロナ禍でなかなか外出する
ことはできず、オンライン授業を受けた後は、ひたすら高校時代の友人とオンラインゲームをするという
日々がしばらく続いていた。変化のない日常であまりにも暇を持て余していたため、６月の終わりから
自動車学校に通い始めた。ようやく生産性のある活動が１つできるようになったことに多少の安心を
覚えたものの、まだまだ時間に余裕があり、“こんな大学生活を送るはずじゃなかったのに”と、
大学入学のタイミングで流行したウイルスをひどく恨んでいた。ただ、それは浪人した自分のせいでも
あるため、恨むに恨み切れない、やるせない気持ちでもあった。

９月の秋学期から PACE（Practical Applications for Communicative English）の
一部対面授業化が発表され、ようやく再上京することになり東京での一人暮らし生活が始まる。
昔東京に住んでいた頃の高校の友だちなどがいたため極度の孤独を感じることはなかったが、大学には
まだほとんど友人がいなかったので多少の寂しさがあった。大学では自分から行動しないと交友関係は
広がらない。それで９月からサッカーサークルに加入することを決めた。依然として猛威を振るっていた
コロナウイルスの影響により活動機会は少なかったもののサークルを通じて多くの友人ができ、春夏学期
からは大学生らしい生活が送れるようになった。しかし感染者がまた増加し始め唯一の対面授業だった
PACE が再び完全オンライン化されるなど、一度近づいた理想の大学生活はまたもや遠のいてしまった。

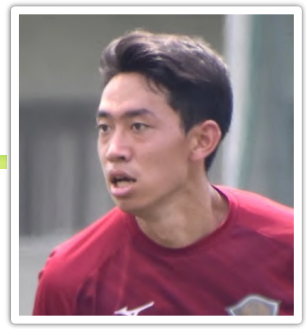
無難に授業を受けて単位を取り、月に１-２度のサークル活動に打ち込むだけでは
充実しているとはいえず、つらいと感じることが多かった。これまでの人生では常に何か目標があり、
やるべきことがあり、周囲に多くの人間がいるのが当たり前だったから、このような生活に満足できない
ことは必定だった。秋冬学期を終えて授業がなくなり、かといってサークルの活動頻度もそれほど
増えなかったため麻雀やゲーム等に時間を費やすようになるが、その瞬間は楽しいと感じるものの、
終わった後に毎回むなしさを感じていた。こうした思いがア式蹴球部への中途入部を決断させることに
なったのは間違いない。

ア式に入部したのは間違いなく良い選択だった。
サッカーは楽しいし、日々の生活に目標と軸ができたし、何よりも週６で関わる仲間ができた。
もちろん入部当初は毎日の活動についていくのが大変で、つらいと感じることもあったけれど。
コロナウイルスが流行せず大学１年生から普通の生活を送ることができていれば、
もしかしたらア式には入部していなかったかもしれない。何が人生をどう左右するかはわからない。
今後ア式のメンバーは OB の方々がそうであったように、どんどんと社会に進出し活躍する人材に
なっていくと思うが、間違いなくこれまでほどコミュニケーションをとることはなくなっていくだろう。
ただ、せっかく様々な要因が複雑に重なって巡り合えた、自分にとってはたった３年間弱だけれども、
共に時間を過ごした仲間なのだから、１年に１度くらいは集まれたらいいな。



アーセナル vs ニューカッスル：ロンドン

木下涼太・山下 諒・清水一貴・向井友紀



⚽ しんどかった瞬間 ～「武」と「フィレンツェ」

木村 航大 （4年 DF） 神奈川・暁星高

ア式の４年間で、最もしんどかった瞬間について書きたい。
それは過酷なラントレや試合に出られない日々でもなく、
うどん屋「武」の特盛に挑戦している時であったように思う。

大学３年の夏、コロナ後初の有観客試合があった。商東戦として部全体で盛り上げた印象的な試合だ。私は訳あって急遽試合に先発出場し、なんとか勝利に貢献できた。その前日の昼、小平キャンパスの目の前にあるうどん屋「武」で昼食をとった。偶然にも超特盛期間限定チャレンジメニューと出くわし注文した。約 2.5 kg のうどんにつけ汁が２種類付いていたと記憶している。練習後で空腹だったうえ、勧められて挑戦心に火がついてしまったのだろう。試合前日ということで、カーボローディングを意識していたのかもしれない。カーボローディングとは、試合日が近づくと食事における炭水化物の割合を増やし、エネルギーを蓄えるという考え方である。また、私は部内でフィジカル部部長という役職についており、日頃から食トレ的なことを周囲に意識づけする役割を担っていた。
それを思い出し、自分が食事に対する意識を高く持つ姿を周囲に示そうとしていたとも考えられる。
もしくは、ただア式随一の大食いという称号を手にしたかっただけなのかもしれない。
様々な感情や思考により、私は行きすぎたカーボローディングを開始してしまった。

2022 年 7 月 31 日 商東戦
駒沢公園第二球技場にて

うどん屋「武」の超特盛

もちろん食べ切る自信はあった。
今まで二郎系ラーメンや特盛蕎麦など、しんどいと言われるものはひと通りこなしてきた。
食べ始めからおよそ 800ｇまでは問題なく食べ進めることができた。しかし、一旦箸が止まった。
満腹となり美味しく食べられる段階が過ぎたのだ。トレーニングだと思い込み、咀嚼と飲み込みの
作業を継続した。減速気味の私に周囲から応援があった。その甲斐もあり、胃に詰め込むことができた。
ここまででおそらく 1.2kg 程だろう。もはや咀嚼しても飲み込むことができず、咀嚼のみを
繰り返していた。大変しんどいのにうどんはまだ半分以上残ってる。絶望を感じるには十分である。
ここで止めたらおよそ 1.3kg のうどんは廃棄となり、店のお母さんお父さんは悲しそうな顔をする。
向かいの席で大盛りを食べている小林君 #10 も“お前何してん”と言うしかなくなるであろう。

せめて見せ場は作りたい。せめて周囲が納得できる終わり方をしたい。
箸を取り、うどんを掬い上げ、つけ汁いっぱいに浸してみた。一部のうどんがつけ汁に隠れたことで、
「残うどん量」は見かけ上少なく見えた。周囲も“いけるんじゃね？”みたいな雰囲気になった。
食べ切れるかもしれない。そう思えた。がしかし、そう思えたに過ぎなかった。その後 1.7kg 程まで
食べたところでギブアップした。しんどかった。悔しかった。ただただ無理な目標設定であったと
言わざるを得ない。“あー、ダメだったかぁ”というお父さんの言葉や、“ここまで食べたのすごいよ”
という決まりきった慰めの言葉をもらい店を後にした。その後 1 年以上「武」には行けなかった。

フィレンツェ市街

ダビデ像
マカデミア美術館

ところ変わってイタリアのフィレンツェ。
ここトスカーナ地方は美食で有名らしい。
部活を引退し、卒論も終了。
卒業旅行として 1 人で来ている。

目の前には“bistecca alla Fiorentina”
（フィレンツェ風ビーフステーキ）の文字。店主には
“1 人だとしても 1kg からしか頼めないが、
本当に大丈夫か？”と念押しされた。
1kg の T ボーンステーキだそうだ。

イタリアの人は 1 人で 1kg くらい平気で平気で食べるものだと思っていたが、そうでもないようだ。
しかし、私はどうしてもフィレンツェのステーキを食べたかったうえ、昼食を取っておらず
相当の空腹だった。そのため 1kg での注文を決めた。店主は明らかに不満そうであった。
その理由は容易に想像が付く。“食べ切れずにせっかくのお肉を廃棄することになる。
適量で美味しく食べてほしい。複数人で分け合って楽しい時間を過ごしてほしい”、等であろう。
そして気さくなイタリア人店主は露骨に不満を表し始めた。あろうことか他のお客さんたちと話し始め、
“見ろよ、1kg の T ボーン 1 人で食うつもりだぜ。1kg だぞって注意したんだけどな。残念だよ”
みたいなことを淡々と物悲しげに語っている。イタリア語だったが、単語と雰囲気で理解できた。

そのおかげで店中の見せ物となった。イタリアの洗礼だと受け止め、美味しそうに（重要）、
全部食べきってやろうと誓った。そして注文から提供までの間に見通しを立てようとした。
ステーキ１kg で検索すると５～７人前とある。また「やってしまった」かもしれないと冷や汗が滲む。
お肉を愛してやまないであろう店主に対して少し申し訳ない気持ちが芽生えた。
ただ、１人で食べ切るのは不可能ではなさそうだ。そして、「武」では 1.7 kg まで食べた実績がある。
うどんと牛肉の違いや部活の引退後で食が細くなったことを加味しても１kg なら許容量と想定できた。
うっかりクロスティーニという料理も頼んでしまったが、まとめてビールで流し込む事にした。

一緒に注文したクロスティーニ

ビステッカ・アラ・
フィオレンティーナ　１kg

いざ提供されると、思ったほどの絶望感は無かった。
店内の空気を変える道筋は見えた。食べてみると、塩だけのシンプルな味付けで勿論美味しい。
それでも咀嚼だけになる段階は来た。苦しい時間。左前には地元の子供たちがいて、
珍しそうにこっちを見てくる。右後ろのアメリカ人老夫婦からは、“ Look ! He can’t move ! ”と
明瞭なコメントが聞こえてくる。それでも笑顔で例の如く食べ進め、最後はナイフとフォークを置き、
手で T ボーンを掴み、骨に付いてる肉を手で直接食べはじめた。その肉は本当に美味しく、
演技することなく美味しそうに食べ切ることができた（脂身の部分は残しました）。
その様子を見た店主からは、”Sorry、アリガトウ” をゲット出来たので逆点勝利であろう。
「武」での経験が活きた瞬間であった。

⚽ 若者の特権とは

小松 怜平 （4年 DF） 北海道・札幌南高

時刻は 23 時前、イスタンブール空港のマクドナルドにて執筆を始めます。
3,300 円もするビッグマックセットをほおばりながら、２週間に渡る卒業旅行の最後を飾る 10 時間超のトランジットです。ハンガリーをスタートに、クロアチア、オーストリア、チェコをひとりで巡った後、イタリア周遊中の同期・木村航大と合流してローマまで共に旅行しました。出発前周囲の大人に旅行の話をすると必ずと言っていいほど“今しかできないからね！”という言葉を掛けられたことを思い出します。プラハで出逢った日本人マダムたちにも同じことを言われました。確かに次、いつ、このように長期で海外旅行ができるか見当もつきません。だからこそ一日一日を噛み締めるように旅してきたつもりですが、あっという間に終わりを迎えようとしています。学生でいられる期間も残り１ヶ月を切り、最近は「今しかできない」ことを強く意識するようになりました。何ができるか考える中で、ふと戸田和幸前監督の言葉が思い出されました。

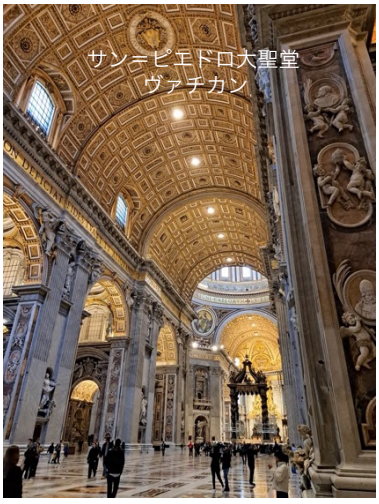
“若者の特権は何だと思う？
俺は失敗がまだ許されるということが、若者だけが持つ特権だと思う。
俺みたいな歳になってからの失敗は取り返しのつかないものが多い”

戸田さんの話には印象的なものが数多くありましたが、
特にこの若者の特権については未だに強烈に心に刻み込まれています。

果たして自分はこの４年間で、どのくらい特権を行使できたでしょうか。失敗と聞いて思い付くのは、同期の前で犯した粗相の数々やリーグ戦の打ち上げでの泥酔など取るに足らないものばかりです。今回の旅行でもやらかしエピソードなどはなく、むしろ不思議なくらい順調にここまで来てしまいました。リスクを背負いたがらないのが自身の性格ではあるのですが、せめて残りの学生期間も含め若者でいられる間は果敢なチャレンジや無謀な挑戦に手を出してみるべきなのではと感じます。戸田さんの話は何も積極的に失敗しろということではないとは思いますが、自分の場合、失敗したくないがために、そもそも行動しないことが多いような気がします。幸い、ア式での４年間を経て一緒にバカをやってくれる仲間に出会えたので、今後も多くの挑戦と失敗をともに経験していきたいと思います。

国会議事堂の夜景　ブダペスト

プラハの街並み



サン＝ピエトロ大聖堂
ヴァチカン

ヴェネツィアの運河と街並み

ラツィオ vs ボローニャ：ローマ

また今回の旅行は自分にとって初めてだらけのもので、それだけ感動する場面も多かったです。ブダペストの夜景やプラハの街並み、ヴァチカンの聖堂など一生忘れることはないと思います。しかし、改めて気づいたことですが、やはりサッカーに勝る感情の揺さぶりを経験することはありませんでした。ア式での日々は本当に特別なもので溢れていたことを再認識しました。有観客での商東戦、帝京にリベンジを達成した瞬間、昇格や優勝のかかった一戦、現役最後にして大学初ゴールを決めた横国戦など全身が震えるような感覚はア式でなければ経験できないものだったと思います。最初の１年こそコロナで思うような生活はできなかったですが、残りの３年は、それを掻き消すかのように素晴らしいピッチ、指導、仲間と共にサッカーに打ち込むことができました。振り返ってみれば、ア式で本気でサッカーに取り組むということも「今しかできない」ことだったのだと気づきます。日々の活動を支えてくださったOBOG の皆さまに改めて感謝すると共に、これからは１人の OB として現役の活動を支えていければと思います。４年間ありがとうございました。

編集後記

⚽ 酉松会にヒエラルキーあり!?

福本　浩　（昭 52 卒）　編集長

桜の開花が近づいて、今年もようやく、何とか発刊にこぎつけることができた。
寄稿してくださった 38 名の皆さんに感謝です。

さて、また『100 年史』のような話になるが、ちょうど 100 年前、
現在の関東大学サッカーリーグの前身となる「ア式蹴球東京カレッジリーグ」が誕生した。
ただし戦争末期に２度の休止があったので、昨年度のリーグ戦は 98 回目の大会になる。
この長い歴史の中で、酉松会に３層のヒエラルキー（階級的組織構造）が生まれたことをご存知だろうか？
いい子、悪い子、普通の子 である。って、わかるかなあ、わかんねえだろうなあ（笑）

では、説明しましょう。（萩本欽一の番組の話をし出すと長くなるので割愛）
いい子＝昇格組、悪い子＝降格組、普通の子＝残留組 。
OBOG 総会に参戦する いい子 は、堂々として声が大きく、羽振りが良さそうな振る舞いを見せる。
一方で、悪い子 は、声も小さく、発言もせず、会場の隅でうなだれている・・なんて、
安心してください、すべて冗談です。（笑）

どういう比率かというと（ここからはホント）、
いい子 と 悪い子 が２割弱で、普通の子 が６割という菱形の階層構造。その最上部に君臨するのは、
何と言っても関東１部で準優勝した昭 16 卒の いい子 たち。（本来は残留組だがトップリーグなので昇格扱い）
ちなみに私は 悪い子 で、それも関東リーグから東京リーグに降格した最下層の OB です。（泣）
肩身が狭いったらありゃしない。一生ついて回るので、現役部員の皆さんはご注意ください。

今年卒業するメンバーは優勝で昇格したので、ガチの いい子 。改めて、おめでとう！
令和６年度シーズンの最高学年メンバーはどうなるか・・楽しみにしてますぞ！

【戦績一覧】

草創期			昭和 21 年 (1946)	1 部	5 位：1 勝 4 敗
大正 10 年 (1921)	**初試合** vs 早稲田高等学院		昭和 22 年 (1947)	1 部	最下位：0 勝 5 敗
専門学校蹴球リーグ 東高師・東大・早高・商大			昭和 23 年 (1948)	2 部	最下位：0 勝 5 敗
大正 11 年 (1922)	最下位：0 勝 3 敗		昭和 24 年 (1949)	3 部	優勝：7 勝 0 敗
大正 12 年 (1923)	～ 関東大震災 ～		昭和 25 年 (1950)	2 部	4 位：2 勝 3 敗
ア式蹴球東京カレッジリーグ			昭和 26 年 (1951)	2 部	4 or 5 位：3 勝 2 敗 1 分
大正 13 年 (1924)	2 部	5 位：1 勝 4 敗	昭和 27 年 (1952)	2 部	4 位：2 勝 3 敗 1 分
大正 14 年 (1925)	2 部	5 位：2 勝 3 敗	昭和 28 年 (1953)	2 部	5 位：1 勝 5 敗
大正 15 年 (1926)	2 部	3 位：2 勝 1 敗 2 分	昭和 29 年 (1954)	2 部	5 位：2 勝 4 敗
昭和 2 年 (1927)	2 部	4 位：2 勝 2 敗 1 分	昭和 30 年 (1955)	2 部	6 位：1 勝 4 敗 1 分
昭和 3 年 (1928)	2 部	4 位：2 勝 2 敗 1 分	昭和 31 年 (1956)	2 部	6 位：1 勝 4 敗 2 分
昭和 4 年 (1929)	2 部	4 位：1 勝 1 敗 3 分	昭和 32 年 (1957)	2 部	5 位：2 勝 3 敗 2 分
昭和 5 年 (1930)	2 部	最下位：勝敗不詳	昭和 33 年 (1958)	2 部	4 位：3 勝 3 敗 1 分
昭和 6 年 (1931)	3 部	最下位：0 勝 4 敗 1 分	昭和 34 年 (1959)	2 部	4 位：2 勝 3 敗 2 分
昭和 7 年 (1932)	4 部	優勝：3 勝 0 敗 2 分	昭和 35 年 (1960)	2 部	6 位：1 勝 4 敗 2 分
昭和 8 年 (1933)	3 部	優勝：5 勝 0 敗	昭和 36 年 (1961)	2 部	7 位：0 勝 4 敗 3 分
昭和 9 年 (1934)	2 部	優勝：5 勝 0 敗	昭和 37 年 (1962)	2 部	3 位：3 勝 4 敗
関東大学リーグ Ⅰ期			昭和 38 年 (1963)	2 部	6 位：2 勝 4 敗 1 分
昭和 10 年 (1935)	1 部	5 位：1 勝 4 敗	昭和 39 年 (1964)	2 部	7 位：2 勝 5 敗
昭和 11 年 (1936)	1 部	5 位：2 勝 3 敗	昭和 40 年 (1965)	2 部	6 位：2 勝 4 敗 1 分
昭和 12 年 (1937)	1 部	最下位：0 勝 5 敗	昭和 41 年 (1966)	2 部	最下位：1 勝 5 敗 1 分
昭和 13 年 (1938)	2 部	優勝：5 勝 0 敗	昭和 42 年 (1967)	3 部	3 位：3 勝 2 敗 2 分
昭和 14 年 (1939)	1 部	5 位：1 勝 2 敗 2 分	**東京都大学リーグ Ⅰ期**		
昭和 15 年 (1940)	1 部	2 位：3 勝 2 敗	昭和 43 年 (1968)	1 部	2 位：6 勝 2 敗 1 分
昭和 16 年 (1941)	1 部	4 位：1 勝 2 敗 2 分	昭和 44 年 (1969)	1 部	5 位：4 勝 4 敗 1 分
昭和 17 年 (1942)	1 部	最下位：1 勝 3 敗 1 分	昭和 45 年 (1970)	1 部	5 位：3 勝 3 敗 3 分
昭和 18 年 (1943)	2 部	優勝：3 勝 0 敗	昭和 46 年 (1971)	1 部	4 位：3 勝 2 敗 2 分
昭和 19 年 (1944)	～ 戦時休止 ～		昭和 47 年 (1972)	1 部	7 位：2 勝 5 敗
昭和 20 年 (1945)	～ 戦時休止 ～		昭和 48 年 (1973)	1 部	4 位：4 勝 3 敗 1 分

関東大学リーグ Ⅱ期			平成 11 年 (1999)	2 部	6 位：2 勝 4 敗 1 分
昭和 49 年 (1974)	2 部	7 位：3 勝 4 敗	平成 12 年 (2000)	3 部 B	2 位：5 勝 1 敗
昭和 50 年 (1975)	2 部	最下位：0 勝 5 敗 2 分	平成 13 年 (2001)	3 部 B	5 位：2 勝 3 敗 2 分
昭和 51 年 (1976)	2 部	7 位：1 勝 5 敗 1 分	平成 14 年 (2002)	3 部 B	7 位：1 勝 4 敗 2 分
東京都大学リーグ Ⅱ期			平成 15 年 (2003)	4 部 C	優勝：6 勝 0 敗 1 分
昭和 52 年 (1977)	1 部	7 位：2 勝 5 敗	平成 16 年 (2004)	3 部 B	4 位：3 勝 2 敗 2 分
昭和 53 年 (1978)	2 部	優勝：6 勝 0 敗 1 分	平成 17 年 (2005)	3 部 B	優勝：6 勝 0 敗 1 分
昭和 54 年 (1979)	1 部	6 位：2 勝 3 敗 2 分	平成 18 年 (2006)	2 部	4 位：5 勝 2 敗 2 分
昭和 55 年 (1980)	1 部	5 位：0 勝 1 敗 6 分	平成 19 年 (2007)	2 部	9 位：1 勝 5 敗 3 分
昭和 56 年 (1981)	1 部	最下位：0 勝 7 敗	平成 20 年 (2008)	3 部	3 位：4 勝 1 敗 3 分
昭和 57 年 (1982)	2 部	4 位：2 勝 1 敗 4 分	平成 21 年 (2009)	3 部	3 位：7 勝 2 敗
昭和 58 年 (1983)	2 部	最下位：0 勝 4 敗 3 分	平成 22 年 (2010)	3 部	3 位：7 勝 2 敗
昭和 59 年 (1984)	3 部 A	優勝：6 勝 1 敗	平成 23 年 (2011)	3 部	2 位：6 勝 2 敗 1 分
昭和 60 年 (1985)	2 部	5 位：3 勝 3 敗 1 分	平成 24 年 (2012)	2 部	7 位：4 勝 5 敗
昭和 61 年 (1986)	2 部	6 位：2 勝 5 敗	平成 25 年 (2013)	2 部	4 位：8 勝 4 敗 6 分
昭和 62 年 (1987)	2 部	3 位：2 勝 2 敗 3 分	平成 26 年 (2014)	2 部	8 位：6 勝11敗 1 分
昭和 63 年 (1988)	2 部	5 位：2 勝 3 敗 2 分	平成 27 年 (2015)	2 部	5 位：9 勝 8 敗 1 分
平成 1 年 (1989)	2 部	最下位：0 勝 5 敗 2 分	平成 28 年 (2016)	2 部	2 位：11勝 4 敗 3 分
平成 2 年 (1990)	3 部 A	優勝：5 勝 1 敗 1 分	平成 29 年 (2017)	1 部	9 位：3 勝12敗 3 分
平成 3 年 (1991)	3 部 A	5 位：1 勝 2 敗 4 分	平成 30 年 (2018)	2 部	5 位：7 勝 7 敗 4 分
平成 4 年 (1992)	3 部 A	2 位：4 勝 1 敗 2 分	令和 1 年 (2019)	2 部	4 位：9 勝 7 敗 2 分
平成 5 年 (1993)	2 部	7 位：1 勝 4 敗 2 分	令和 2 年 (2020)	2 部	6 位：5 勝 6 敗 2 分
平成 6 年 (1994)	3 部 B	優勝：5 勝 0 敗 2 分	令和 3 年 (2021)	2 部	3 位：9 勝 5 敗 4 分
平成 7 年 (1995)	2 部	5 位：3 勝 3 敗 1 分	令和 4 年 (2022)	2 部	8 位：9 勝 8 敗 3 分
平成 8 年 (1996)	2 部	5 位：3 勝 4 敗	関東大学リーグ 東京・神奈川 Ⅰ期		
平成 9 年 (1997)	2 部	最下位：0 勝 4 敗 3 分	令和 5 年 (2023)	2 部	優勝：17勝 4 敗 1 分
平成 10 年 (1998)	3 部 A	優勝：6 勝 1 敗	令和 6 年 (2024)	1 部	